

病慘但なれば父母を呼ぶといふのは、幾等二十世紀の今日でも少しも變りはない。何か思想界に大動搖が起つて、革新を熱望する際には、何れの邊にか、必ず「自然」や「天則」が神輿として擔ぎ出され、旗幟として振翳されぬことは、殆どない。名目や稱呼には色々の差はあるが、屹度「自然」の前に忠實ならんと誓ふか、「天則」に従つて新なる生命を得んと叫び廻らぬことは無いのである。それは當然な事で、人生の全部は自然を基礎として成立つてゐるからだ。

◎更に狭く藝術と自然との關係に就いて見る。矢張同じ現象と道理とが窺はれる。古今東西の長い廣い藝術史上の變遷や流派には色々の波瀾や特色があるであらうが、全く「自然」の現象、人事をも含むと、無交渉な藝術といふものはあるまい。或時代の或派

では自然を蔑如せるの態度を以て、天高く空想の雄翅を揮ふのを得意と爲たものもあらう。偏へに自家の理想にあこがれて、此の世ならぬ莊嚴美妙の淨界を建立するに精力を傾注した詩人もあらう。又只管自家の熱烈なる情の之くがまゝに妙手を役し、其所に一種燦然たる藝術品を結撰し得た天才もあつたらう。けれども何れも精細なる剖析の徹底するところ、必ず「自然」の現象に多くの資料を仰ぎ、甚深の寄與を受けて居るの事實を發見せぬ場合は無いであらう。此様ことは言ふにも及ばぬ道理ではあるが、世人の豫想よりも、一層事實は奈何なる藝術にも「自然」の勢力が深く入つてゐると思ふので、一言添へて置くのである。

◎更に近く我が邦現時の小説界の形勢に就いて見る。種々の流派が相角逐してゐると世人は云ふ。事實或は然であるかも知れ

ぬ。假に三四派が對峙してゐると爲よう。その中、現に喧しい自然派と非自然派(色々の流派を含む)との別に就いて、此等の作風と自然の現象(人生の真相)とは何ういふ關係に於いて立つて居るか、一寸考へて見たら何うか。その所謂自然派のみ獨り能く自然の現象(人生の真相)を如實に表現し得て、他の所謂非自然派は自然の現象の虚偽のみを傳へてゐるであらうか。何人も直ちに然りとは速断することは出来まい。尙確かに嚴密なる研究の餘地あることを認めぬ譯には行かぬ。

●眞を描くを趣意とするとか、人情世態を宛然に見せるのだとか、小宇宙を眼前に活現さすのだとか、色々と看板の文字には違ふところはあつても、實際の貨物は虚偽のない人事世相を寫し出して見せようといふのに外ならぬ。寫實主義といひ、徹底寫實

主義といひ、自然主義といひ、寫實主義といふ。それで足らず、今や徹頭徹尾自然主義や徹上徹下寫實主義といふ派も現はれさうな趨勢である。名目と流派とは人に異を樹つるを好むの性あり、好尙上微細の相異が之れを言語に寫す時、大いなる相違の響となる以上、ますます數の繁くなるのみであらう。しかし名目に迷はず、流派の説に驚かず、靜に彼等の作品に就いて實質奈何と吟味せねばならぬ。その上にて看板に虚偽なき貨物ばかりであるか、中には賸物も多く混つてゐるか、否かを仔細に調べて見ねばならぬ。

●今の所謂自然派や徹上徹下派のみが人生の自然を如實に描かうと企てゝゐたのではない。名目は違ひ、説には多少の相違はあつても、覗ふところは、人生の自然を出來得るだけ深く寫さう

と爲たのは昔しからのことである。唯世相は廣い、自然は無盡藏であるから、描き盡し、寫し盡せぬ部分が、何時も限りなく残つてゐる。時と共に少しづつ覗みどころや、觀法や、寫法や、筆の調子が違つてゆくのである。昔は非自然、非真相ばかりを書き、現時は人生の自然と真相とを描きえて遺憾ないなど、思つたら潜上の沙汰であらう。我々は何時如何なる手段や方法を以てしても、月の影を葉末の雫に宿して、一二滴づつ汲んでゐるのに過ぎぬのである。自然の姿と心を圓現する譯にはゆかぬ。

●人生の真相といふものは無限に複雑で、無限の含蓄をもつて居るのだから、先づ之れを探り盡し、知り盡すといふ事は、如何なる天才でも一代や二代で出来る筈のものではない。否、千萬人の大天才が何百代それに心を潜めても、残らず究めて了ふなど、

云ふ事は、到底出来やう筈はない。何れも或一片、或一端に觸れ、探り捉へ、描くといふに過ぎぬ。その一端一片を迫眞の程度に洞察し、描破し得るものは、所謂成功の作者と稱へられるのである。又その一片一端でさへも觀法、取材、描法、文致等の相違に依りて表現の結果に霄壤の差を生ずる。いや單に人生の一端、自然の一片に對する觀法の相違が、作品の性質を玉と瓦とに別けて了ふ場合もある。

●それであるから、世人が常に事もなげに、我れは人生の眞を描いて徹底せねば止まぬの、自然のまゝなる人生を如實に表現して見るのと、豪語を吐いて見たところが、各自の眼光の弱い燈火で、闇中を僅かに照して物を見るのに過ぎぬ。その弱い眼光にも、色々の癖あり、故障あつて、却々満足なのは、澤山にある譯のもの

では無い。色盲もあれば、斜視もあり、近眼もあれば、老眼もあり、見えさうで根から見えぬ黒障眼もあるのだ。で、餘り大きな事をいふと、盲人が象の尾を撫つて、拂子と象とは兄弟だと叫ぶ謔語に陥るかも知れぬ。謙遜の態度を以て、小心に自然の研究に従事せねばならぬ。

●で、今の所謂自然派と所謂非自然派(自然派以外の各派)との分岐點は何處にあるかと、實地に調べて見ねばならぬ。主張や議論にのみ信を置いてはならぬ。看板と貨物と多少相異なるのが例になつてゐる世の中である。油断はならぬ。吾人の觀察する所に依れば、自然派の眞の特色ある傑作もあるであらうが、昨今頻々として出る、所謂自然派の作なるものを讀むのに、他の派を以て目せられてゐる作家のと比較して、一段と深く自然の精髓に分

け入つて居るとは容易に思へぬ。一段と緊密に人生問題の關鍵を握り得たとも見えぬ。

●然らば、今の所謂自然派の作物の特色は何處にあるのであらう？我等の愚見に依れば、此の派(少くも其の多數末派の作物)と他の派との相違といふものがありとすれば、それは取材の方面及び區域に於いて幾分異つてゐるのと、描寫法に於いて多少違つたところがある位のこと、に過ぎぬと思ふ。未だ自然に對し人生に對して觀法の根本を異にし、立脚地を異にする程の程度には進んで居らぬと考へる。

●取材の區域が著く作者自身の頭上又は周圍に封鎖されてゐる趣きが見え、描寫の法は善く云へば單刀直入式、天真流露式であるが、缺點をいふと餘りに遣りつ放しで、杜撰で、粗笨で、亂暴だ

ともいひ得る。場合次第で、其のさつぱりと飾氣のない浴衣がけの兵兒帶姿といふ所も悪くはない。けれども何うかすると、垢や泥や、それよりもつと甚い不潔なものが附着してゐる場合もないとは云へぬ。垢を洗ひ去つた後のさつぱり爲てゐるのなら宜しいが、不精で、皺くちやな浴衣を引かけ、表立つた場所へも無遠慮に立ち現れる者と爲ると、同じ飾氣はないとするも、後者に對しては誰も眉をひそめるであらう。此の區別を忘れられては困る。

◎要するに、今の自然派中の多數の作は、取材の方面と描寫の法に於いて、幾分の新意はあるが、他の派に比し、自然に對して一層緊密な關係が出来たとは思へぬ。故に今のところは、根本に於ける大なる相違があるとは疑はしい。取材の狭くなり、描寫の飾氣

のない中に、一段と深く、人生の精髓に徹底したものがあるか、何うか、研究を要することであらう。

◎自然派と他派との別は重大なもので無く、又前者は後者よりも人生問題の解釋に於いて、進んで居らぬとしても、その取材なり描寫なりが、現時の趣味に合し、好尚に適つてゐるとすれば、一般に歓迎せられ、又勢力を得るに至るのは當然である。しかし趣味の變遷と好尚の推移とは、世間の所謂流行といふもの、一進一退と大差はない。眞に文學の爲めに貢献しやうといふ考への輩は、世の趣味に迎合し、好尚の推移を追うて走る以外に、不拔の基礎を求めて、確實に發展すべき進路に就かねばならぬ。今の自然派の眞價値をも十分に問うて、其の長所、其の特色をも知り、以て參考とすべきである。世舉つて褒めても雷同してはならぬ。世

擧つて譏つても、美點があつたら、見落としてはならぬ。各目や能書に惑はされて、實質を見損つては尙々ならぬ。

二炷三炷(二)

●近頃の自然派の狀態は實に奇觀だ。その思想の根本に於て柄鑿相容れざる凡そ四五種 of 思想が同じ旗幟の下に押合ひ、揉合ひ、摺合つてゐる。宛然娘一人に婿八人亂入の姿だ。それ程「自然」といふ名稱が尊いのか。この事既に大不自然である。

●凡そ主義を標榜して一致の活動を試むると云ふは、同思想、同目的の爲に努力するのであらう。然るに氷炭相容れざる思想を抱きながら、漫然苟合して、同一名稱の下に雜居するのは實に愚な話である。味方に取りては徒らに混亂を極めて他の誤解を招く虞れあり、且薰蕕併せ焼るゝの患ひを免れない。又論敵に取りては無益の煩累を増すのみで、論戰の歩を進める邪魔になる。文

壇全體の進歩の爲には、同一の基礎に立つものゝみ、同名稱の下に結合すべきである。併し政黨方面に見るやうな主義以外に離合の動機があると云ふのなら、これも是非ない次第である。

●砂糖を舐めて甘いと感じると、後で追懐して甘かつたと思ふのとは感じ方が大いに違ふ。と云ふのは二葉亭氏の説だ。眞に然りて、筆を執る時には實感を書くのでは無い、縦合實驗の果であつても、それは追懐だ、想像だ。然るに、今の自然派は砂糖を舐めながら筆を執つて、甘いと言ふ、書かねば偽になると云ふのである。那樣な流儀が複雑な事象を描く場合に應用の出來よう筈はない。

●現實その儘の描寫が何故に尊いのか、實感をさらけ出すのが何故よいか。先づ此の根本問題からして一向に解けてゐない。彼等は現實派だといふが、此の點から見ると、大假定派だ、大空想

派だと云つて可い。

●我輩の近作に對する花袋氏の評は實に奇抜である。氏の無理想無目的であると云ふ、人生觀、藝術觀から出立して、他の人生觀、藝術觀を彼此批評する、其の尺度が何處から出るのであらう。理想も目的も無いが主義だけはあると云ふのか。無目的の主義といふものは人間の解し得べき言葉ではない。その無から有を抽出して來る所は何うしても魔法遣ひの行方だ。些と驚かざるを得ぬ。第一無目的であるならば何の爲めに作し、評し、又主義の宣傳に努力するのであらう。

●花袋氏は云ふであらう。理想、目的、趣味、これ等の者は皆我輩は排する。他の作を評するの標準は唯我が實驗、實感のみ。これに合ふを褒め、合ざるを貶すのみだと。左様答へなければ嘘だ。果して

然であるとするれば、君の實驗、實感の容積と、人生の複雑多様な事象の容積とは同量であると云ひ得るか。君の實驗、實感以外に異なる多くの實驗や事實が無いと云ひ得るか。眞逆ないとは幾等大膽な君でも言ふことは出来まい。然らば我が近作の主人公に對して「あんな男があるだらうか、あんなハイカラ女があるだらうか」と不遜の言を吐く前に、君自らの實驗圈内の廣さを測つて見る責任があると思ふ。作の巧拙に對しては何も云ふべきでは無いが批評の根據に對しては質問するの權利がある。

◎又君は我が近作を全然草双紙式だと一瞬に附してゐるが、賣言葉に買言葉なら、君の作は「こんやく本」以下だとも云ひ得る。けれど我が輩は君の作の或者に對しては相當の價値は認めてゐる。第一茲で問ふことがある。君は偽らざる情を寫す主義だが

彼の「土手の家」の少女が春情に悶えしところは、君自身の偽らざる情であるか。然らざれば何時少女の肚裏へ君は入り込んで見たのであろう。今までの主義を撤回するか、然らざれば以上の問に明答を與へよ。

◎君は又我が近作を空想文學であるから無價値だといふ。空想の全く作用せざる文學が、何うして成立つことが出来る。君のやうな不透明な頭では追想も想像も實感も同一に見るか知らぬが、我等はその間の別を知つてゐる。實感に據らがる文學を空想文學といふなら、君の作全體も亦空想文學だ、無價値だ、と云ふことが出来よう。殊に異性の心裏を描くものは皆偽ッばちを書いたものであるといふべきだ。男が眞もの、女になれる術を君にしても知つてはゐまい。

◎自然派の論者は何れも「悲哀」「苦悶」を賣物にして不_だ斷_だ線返してゐるが、何となく賣女の空涙が聯想される。つくり笑ひも餘り感心したもので無いが、出ない涙をふり搾_{しぼ}つて、故意_{こゝろ}とらしい澁面も餘り心持のよいものではない。(四十一年三月)

二 炷 三 炷 (二)

◎一切の權威理想を撥無して現實に對する時、そこには一樣平等の萬象雜然として横はるのみ、何等眞僞善惡の別があらう。天溪氏が總の價値を現實より剝奪するといふ説は氏の立脚地からは當然の歸結である。然るに尙僞善生活を憎むと云ふ論のあゝるのは不思議千萬である。僞善も眞善も超價値觀からは同一無差別の現實相であるべき筈だ。もし僞善生活を排すと云はゞ一面には眞善生活の理想を持して、之と對照せねば眞僞の別の立つべき様はない。この點から見ると、天溪氏の虛無主義は英雄人を欺くの巧妙な方便であつて、實は一種の道德家、理想家たるに過ぎぬ。

◎自然派の或人々の説に依ると、總ての人爲作用、人爲修飾を拂ひ去つた後に残る露出しの事象のみが眞現實で、他は僞現實である。と云ふ風に説く。確に現實二元觀を立てゝゐる。されど此の二元を立てるには其の境界線を劃することが非常の困難である。人爲作用を全く剝落し去つた後の人生といふものは今日の我々では到底考へることは出来ぬ。特に複雑な社會の空氣を呼吸し、先人傳來の思想や教育を繼承して育つた現代の人間には、口で何と云つても、事實上これを分つことは不可能である。現實をむき出しにすると云つても、何處迄が蔽はれたものであるか、其の區別が明かでない限りは無意味である。或理想を提げて臨む時、始めて其の判斷が出来るのである。

◎例へば、三枚襲に盛裝した美人があるとする。之れを見て、美人

の眞相は不斷着姿でなければ分らぬと云ふ。否不斷着でも未だ虚僞の部分が深い。浴衣がけの姿を見ねば眞相は窺へぬと云ふ。説も出よう。更に赤裸々に爲て見ねばならぬと言ふかも知れぬ。それにも満足せず、皮を剥ぎ肉を削いで骸骨にせねば承知が出来ぬと考へる人も無いとは云へぬ。所謂現實の眞相、曝露された現實は、其の何れを指すのであらう？三枚襲より骸骨に至るまでの五階段を總括、るめて美人の眞相とも見られる。又裸體の所に止つて之を眞相とも云はれる。更に骸骨に透過して始めて眞相茲に在りとも云へるのである。現實曝露問題もこれと同理であつて、事實に就いて考へると、却々そのむき出す程度、限界といふものが容易に定められるものでは無い。それ故に現實曝露に進む前に現實研究が第一に重大事である。曝露を主とする時

には却つて現實を損じ、現實を局限し、現實を削減し去る結果となる。在るがまゝの現實を見るといふ以上は蔽はれたるも露はれたるも、修飾あるも無飾なるも、皆一様の價値に置いて眺めねばならぬ。然るに曝露せられたるものを特に尊ぶは確かに、或理想、或標準に執して、現實に選擇を行なつてゐるのだ。在りのまゝでは無い。

◎早稻田文學社中、片山天弦氏は武者振一際勇ましく見受るが、惜いことには氏の文は自然派本來の主張なる無飾卒直を尊ぶといふ趣意から餘りに離れ過ぎる。殆ど弄語派に墮せんと爲てゐる。旋轉反覆を極めて要領を得ること容易ならぬ文の行り方である。達意を主とすべき論文の體としては別に一工夫されたものである。

◎天弦氏は一方に於て、自然派文學は人生の根本相、即ち悲哀痛苦、醜惡を表現し、此の未解決の苦悶を愬へ、そして解決を得るの努力を勧誘するを、本意本領とする、とやうに説いてゐる。然るに他方では自然派の文學は眞實を語ることに依つて、憂ひを消し怖れを去り、心の重荷を棄て、安住を得、壓迫を免れるのが目的である。即ち輕快甘美ならぬ一味の悅樂を興へるが眞趣であると論斷してゐる。前には沈黙の慟哭の文學であると絶叫し、後には悅樂慰安の文學だと云ふ。此の兩端の調和は何う爲てつけるか、吾人には一寸解しかねる。未解決の苦痛を脱して解決に努力するの心を促進せんとする鞭撻激勵の意と、排悶安慰を興ふるの企圖とは消極積極の差あり、晏如として佇立するの姿と、藻掻つつ猛進するの勢との相違がある。到底兩立が出来さうにない。

前説是ならば後説は非とせねばならぬ。氏の意は何れを正とするのであらう？

●田山花袋氏の無理想無目的の人生観から、自然主義を唱へ、その主義の宣傳の爲めに作し、評し努力するを不思議であると考え、一撃を加へて置いたが、其の辯解は面白い。無目的といふのは人生観の方で、文學には関係がないといふことである。我等は文學も亦人生の一現象、一大事である以上、當然人生観内に包括せらるべきものであつて、獨立し得べき筈はないと信ずる。特に文學を以て生命とする文士にして、無理想無目的の人生観を抱く以上、何れの派、何れの主義が何うであらうと、空吹く風程にも痛痒を感じぬ態度で、その日々の出来心に任すべき筈だ。自然派が起るも、亡ぶるも一向無関係であるべき道理だと信ずる。人生

観は文學には無関係、没交渉なものだと考へてゐる所を見ると、他の頭の透明不透明などを議する資格は無い。それとも氏の所謂人生観なるものは、人生の全體を蔽ふ見解では無く、唯一種の當座臨機の駄辯で通用の利かぬ場合が多いのだと云ふのなら、人生観など、大きく出るのは抑もの間違である。

●天溪氏の「自然派」の作には脚色を排すといふ、所謂無脚色説は花袋氏の近作『祖父母』に於て遺憾なく實現せられてゐる。その結果に就いて見ると、一篇の寫生文に墮して了つた。我以外の人物を在りのまゝに寫す時は、寫生文の範圍に閉塞せられざるを得ぬのは自然の成行である。自然派の作者が其の主義に忠實なる限りは、竟に寫生文を作るを以て能事とする運命を免がれぬのである。

●創作無脚色説に幾許の價值あるか今は論せぬとして、我輩は寧ろ批評無脚色説を唱へたい。彼は自然派反對であるから、彼の作は空想文學であると、讀まん先に脚色をつけて評にかゝり、又内々旨いと感服しながら同僚の機嫌を損じてはと、心にも無い悪罵を並べたり、實は拙さに恐縮しながら、親類筋だからと空々しい推讃の辭を呈したりする、何れも是れ有脚色の批評である。我等は創作の無脚色を主張する前に、先づ批評の無脚色を大いに鼓吹したいと思ふ。

●現時はもう曖昧主義を容れるの餘地など毫もない、敵か、然らざれば味方！討つか、然らざれば討たる、唯これのみ！

●關ヶ原に於ける金吾秀秋のやうな態度は今や文壇に勢力を維持するの策とするに足らぬ。如斯き舊式の操縦策の上に樂天

的の夢を繰返す輩は早晚自滅の時期が屹度来る。

●二葉亭氏の説に依ると、露國現代の文學は自然主義の反動文學で代表作家はアンドレーフだといふ。然るに昇曙夢氏の論には、自然主義は恰も中樞神經のやうに近代露西亞文學を貫通して、今日では殆ど露文學の一大特徴と認められて居るとある。そしてアンドレーフをも自然主義作家の例中に編入してある。兩露文學通の説、何れが正しきか、現實觀察も亦難いかな！

●二葉亭氏曰く、露國批評家は旨いことを謂つてゐる。自然主義は、塵に塗れてゐる、其塵を段々と振ひ落して、來た。アンドレーフに至つて、全く落ち切たと謂つてゐる。チエホフ、カラレンコ、ゴルキー、アンドレーフといふ風に段々と塵を振ひ落したのだ。日本の近來の傾向は塵に塗れやうと努めてゐるのだ、何うしても

一時代遅れてゐる様な氣持がする。と聞くべき説である。彼の「近代的憂愁」の「近代的文學」の「近代思想」などいふ字面に隨喜する人々は、今後は一步を進めて現代云々と改正する工夫を要する。そして其の思想も近代でなく現代に引直す努力が肝要であらう。塵溜の芥を浴せ廻るのが今の自然派だと我輩は曾て言つた。露國の批評家も同じ様なことを考へてゐるものだと微笑される。(四十一年四月)

附 錄 關西瞥見記

關西警見記

其一、旅日記

庚子の年七月二日東京を出發して八月一日に歸る先づ此の間の旅日記を左に誌す。

二日 午後六時發の汽車にて京都を指して旅出つ。柳川、春葉君停車場まで見送られ、我が上途に餞するの句あり。

雲に乗る衣はかるし夏羽織

三日 午前九時京都七條の停車場に着く直ちに車を驅りて書肆便利堂を訪ひ其の案内に依り柳の馬場三條通り南入樋町白木屋に宿を定む。休憩の後、『京都』『日の出』二新聞社を訪ふ。夕方より堀江、松華、小川、煙村、大森、痴雪の三氏

四日

相前後して來訪せらる。煙村痴雪二氏と共に祇園の某樓に小酌、「京の四季」の舞など見る。
朝より煙村氏の案内にて西大谷清水寺、鳥部山、真葛ヶ原その他を歴觀し、七條通り三十三間堂前なる草鞋屋と云ふに入りて晝餉を喫うべて後、氏と別る。午後六時頃より丸太通に中山白峰氏を訪ひて久濶を叙し閑談刻を移して歸る不在跡に黒田天外氏來訪せられたり。

五日

二條停車場より瀛車にて花園妙心寺に野原稻藏氏を訪ふ。旅行中なりとて在らず。是れより太秦の廣隆寺に詣うて引返して雙ヶ岡に兼好法師が舊庵を尋ね、墓畔の石を紀念に拾ひ再び瀛車にて嵯峨野を経て嵐山に遊び、大堰川を船にて溯り嵐峽館に午餐入浴の後、日暮頃に歸る。海

六日

暮より煙村氏と荒神橋西詰、雪月樓にて對酌す。
午前九時雨をついて奈良鐵道に依り宇治に遊び平等院に鳳凰堂を見、菊屋環碧樓に午餐し、朝日焼を買ひ、山吹の名所隆昌院に詣うて、京に歸る。此日「日の出」「京都」二新聞社諸氏が我が爲に招應を開くの約あり。午後五時木屋町富貴樓に赴く。堀江松華、中川霞城、小林紫電、大森痴雪、歌川國松、安藤仲太郎、新海非風の諸君來會せらる。

七日

朝來雨霏々として霽れず。國松松華二氏を訪ひて後籠居夜に入りて大坂より舊友畠山眼外氏遠く來り訪ふ。床を並べて往事を語り更の関るを知らず。

八日

朝、便利堂主人及び小川煙村氏來訪。九時頃より眼外氏と共に知恩院に詣うて、夫れより東山の吉水樓に對酌す。此

九日

の夜大阪の平尾不孤氏より電報あり。
 晴午前便利堂主人の案内にて北野の天神平野神社大徳寺金閣寺上加茂下加茂等に遊び八新と云ふ料亭にて午餉す午後三時幾分の流車にて大阪に赴く蓋し大阪毎日新聞社より六千號の大祝宴會の招狀到來これに臨まんが爲め也大阪着後直ちに『大阪毎日』社を訪ふ編輯局の知人諸氏は皆既に中の島公園なる大阪俱樂部の設けの席に在りと云ふ其所に到れば早俳優への懸賞授與の式終りて宴會に移らんとする所なりき菊池幽芳水谷不倒左東柳水の三氏と久濶を叙し相携へて飾立てたる船に上り淀川の中流に播へたる船土俵の上にて大阪の大相撲數番を見る歸途船を南地の某河岸に廻し同所某樓

に催ふせる中川氏の饗宴に列し終りて水谷不倒氏の邸に一泊。

十日

西江戸堀三丁目なる島山眼外氏邸に滯留中の宿を定む。夕刻より幽芳不倒流水國峰諸氏の催ふしに係る灘萬の招宴に赴く。

十一日

朝左東柳水金尾思西の二氏來訪流水氏の案内にて浪花座に我當一座の演劇を見る。

十二日

浩々歌客氏と歌川國峰氏來訪午後五時頃特に余の爲に堺卯樓に催ふせる在阪諸文士の招醜に臨む來會せられたる人々は左の諸君なり。

- 須藤南翠
- 菊池幽芳
- 渡邊霞亭
- 磯野秋渚
- 木崎好尙
- 河野嘯月
- 岡田翠雨
- 角田浩々

三木天遊 平尾不孤 薄田泣菫 金尾思西
水谷不倒 歌川國峰 齋藤弔花 左東柳水

香川蓬洲 梁田晴嵐

此の夜田中小太郎、島山眼外二氏と街上を散歩す。

十三日

田中、島山二氏と共に住吉公園に遊び、小山樓にて入浴の後、小酌夕方に歸阪、千日前を漫歩す。

十四日

金尾文淵堂に薄田泣菫氏を訪ひ、不孤、思西二氏を合せ共に大融寺に淀君の墓を拂ひ、藤浪亭と云ふに入りて、名物の豆腐料理を喫べ、午後より泉布觀と稱ふる所に大阪美術展覽所を見る。源八渡船に依り櫻の宮に遊び、汽車にて天王寺に往き、毘沙門の池紅葉寺、天王寺等を歴覽し、再び文淵堂に立寄り、晚餐の後、歸宿夜に入りて市中を散歩す。

十五日

午前幽芳氏來訪、午後宇野、島山二氏と中の島森吉樓にて淺酌す。

十六日

午前九時半の汽車にて再び京都に赴く。宿所は前同様柳の馬場三條南入の白木屋也。午前一人車を驅りて大極殿より銀閣寺を廻覽す。夜に入りて祇園の夜宮を見んとて、丸山より堀川まで四條通を漫歩して歸る。不在跡に煙村氏來訪せらる。

十七日

此の日は祇園會の當日にて市中賑ふ。朝煙村氏來訪共に四條通鬘附屋某氏方の二階にて飾山及び鉾の行列を見る。此の席にて始めて森川蕉亭氏を知る。三人連だちて先斗町の河原に携へたる納涼臺の上にて午餉を喫す。午後より蕉亭氏の先導にて南禪寺、永觀堂、若王子神社をめぐ

ぐり、黒谷に詣で、歸る夜に入りて煙村、蕉亭、二氏再び來訪。二氏と共に明日大原に遠足の約をなす。

十八日 蕉亭、煙村の二氏と共に愛宕郡田中を過ぎ、右に一乗寺修學院などの村落、雨中に炊烟を颯々る山端の奇景を眺め、平八茶屋に入りて午餐を終へ、八瀬を経て強雨を衝きつゝ、大原の温泉宿大原館に一泊。

十九日 大原館を立出で朧清水を汲み、寂光院に建禮門院の墓を弔ひ、更に道を轉じて三千院を訪ひ、三宅八幡に詣うで、午後一時京都の宿に着す。此の夜新京極より四條通を漫歩し、小紋帳數冊を購ふ。

二十日 午前八時宿を立出で銀行にて爲換金を請取り、東本願寺に參詣。十時十分の汽車にて京都を發し、江州馬場の停

車場にて降り、直ちに車を驅りて瀬多の唐橋を見て、石山寺に詣うで、瀬多川縁の丸屋對虹樓にて午餉をすませ、引返して膳所の城趾を眺め、粟津の松原を通り、琵琶湖畔の景勝を遠く唐崎に探り、三井寺に立戻りて小憩。京都の土産に辨慶の力餅を一折買求め、大津湖畔の魚善にて雨後の彩虹を湖上に眺めつゝ、獨酌を試み、午後七時五分の汽車に京に歸る。此の夜蕉亭氏來訪。

廿一日 朝、葛籠を買ひて歸東の用意を整ふ。野原稻藏氏來訪せらる。次で蕉亭氏又到る。二氏と共に大佛殿、三十三間堂を見て、豐國神社に詣で、二氏水茶屋に休憩中、我れは阿彌陀ヶ峰に登り、豐公の墓壁に詣づ。其れより汽車にて伏見の稻荷に詣うで、深草の里に雀の御宿を尋ね、藤の森神社の

前を過ぎて墨染櫻の跡を偲び、伏見停車場より汽車にて日没れて後、七條に着直ちに車を丸山に馳せ、平野屋にて三人鼎座して清酌す。歸途四條通の古道具屋にて、鬼の木彫三箇買ふ。

廿二日

朝、先師大西祝先生を烏丸の立花小路に訪へども、醫師が客に接するを許さずとて、親く先生に面晤するを得ずして歸る。九時四十分の汽車にて京都を辭して再び大阪に向ふ。宿所は例に依りて島山氏の邸也。此の夜島山氏と共に天神橋下のピーヤホールに涼を納る。

廿三日

朝、浩々歌客氏を會根崎の同邸に訪ひ氏と相携へて北野の鶴の茶屋に清酌。それより更に座を某樓に轉じて痛飲。醉後船を僦ひて蜷川に浮び、淀川に出で、更闌くるまで

廿四日

朝櫻の宮に、幽芳氏を訪ひ、午餐に浪花名物の鮎の生肉を馳走になりて歸る。歸途文淵堂に泣菫不孤、思西三氏を訪ふ。此の夜幽芳氏の厚意にて同邸に一泊。

廿五日

幽芳氏の先導にて奈良見物の途に上る。四條畷にて下車。先づ小楠公社に詣う。再び奈良まで汽車。午餉を武藏野にて喫う。三笠山、春日神社、東大寺、猿澤の池、その他多くの名所舊蹟を尋ね、奈良人形、根來塗、霰酒を買ひて歸阪。京與にて晚餐。幽芳氏と共に天滿祭を見る。壯觀比なし。

廿六日

朝、三木天遊、薄田泣菫の二氏來訪。夜に入り、眼外氏と中の島公園に逍遙。

中流に清風を領して、浪花名物の船遊びを見る。興尤も深かりき。歸途江戸堀まで船にて送らる。

廿七日

大阪を發して宮島遊覽の途に就く。約あるに依り山下雨花氏を訪はんとて住吉にて下車氏あらず。直ちに汽車にて舞子に赴き海岸の海松樓に投宿。黄昏淡路島を正面に見るの景致の佳言ひがたし。九時頃我に刺を通じて來訪せる人あり。是れ雨花氏の我れを追ひて來たれるなり。晚餐を共にして快談悉す。床をならべて睡る。

廿八日

朝雨花氏と海濱に逍遙して麗しき小石を拾ふ。名物の櫻漬を買ひ、雨花氏と袂を別ちて舞子を辭す。午後七時藝州宮島驛に着直ちに小蒸汽船にて嚴島に渡り、紅葉谷の岩惣に投宿。

廿九日

島内所々の名所を見て御山に登る。山上より大黒小黒の諸島を始め、遠くは伊豫路をも一目に見渡すの偉觀に

三十日

朝梅田着例に依り西江戸堀の畠山氏邸に入る。半日休憩く。同所の名木細工の鹿箸などを購ひ、夜行の汽車にて歸阪の途に就く。

朝梅田着例に依り西江戸堀の畠山氏邸に入る。半日休憩。夕方より幽芳南翠不倒、柳水四氏の邸を告別の爲に歴訪せり。柳水國峰の二氏は某樓に我を引いて送別の筵を張らる。

卅一日

午後一時五十分の網島發の汽車にて、一ヶ月間の關西の旅を終りて、いよいよ歸東の途に就く。畠山眼外氏停車場まで見送らる。

八月一日

午前八時、東京新橋着。

其二 京都

桓武の昔延暦十三年都を其所に奠め給ひしより此に一千一百十餘年の間日本歴史の最も華かなる部分の多くが演ぜられた舞臺として本邦美術の精粹の鍾まる處として歴代の名高き人々に縁故深く幾多の舊蹟の尙存するの地として山紫水明の大公園として京都は我等に久しい前から慕しく思はせたのであつた。昨年(三十三年)七月初旬始めて宿願を果すの機を得て寤寐忘れずに床し懐しと思つた花洛の地を踏む事になつた。東山の翠嵐欄に落ちて鴨河の水光湘簾に空華を描くの時先づ我が心頭に映じ來つた感は何々ぞ。

まるい京都

京都に著して間もなく自分が感じた所を包まず言はう。寂漚い。繊細圓圓内氣な古色蒼然小奇麗箱庭らしい赤い陰氣薄暗い病葉の麗しさ柔弱しい此等の念が斷片に浮んだ秩序なく譯もない感じであるから勿論重複も矛盾も遺漏もあらう。目醒むる許の山の緑と雪にも増さる砂の光を見て後は更に複雑な念に成つたのであるが冒頭に掲げたのも一面の事實には相違ない。先づ著るく京都を圓圓いと感じたのは蒲團着て寐たる姿の東山を始め所謂三十六峰を見渡した所何れも撫たかの様ふツくりとなだらかな姿は何うしても圓圓いと云ふ感を起させる途上を通る女の顔も東京などは趣が變つて概ね頬の豊かな眼の洞

然とした所どうしても團圓いといふ感が浮ぶ。それに團扇を見
ると、東京のは楕圓形を成して居るのに、此所のは圓々である。男
女の別なく、京の人に應接すると、自然その角の無い溫柔な、鋒鉞
を露さぬ所、これもまた團圓と云ふ語で形容が出来、因で強い
揚音の角立つ響を缺いて居る。彼の京辯なるものを聞くと、是れ
も亦宛轉として、口の中にまろばす趣致があつて、何うやら團圓
いやうに思はれる。

寂た澁い京都

寂と云ひ澁いと云ひ、古色蒼然と云ふ、必ずしも同一の意味では
ないけれど、兄弟分程の縁も似寄もあるのだから、一緒にして置
く。京都は千年以上の歴史を持つて居ることや、古い神社佛閣に

富んで居る事が既に未見ぬ人にも是れだけの感じは起させる。
が實地に就いて見ると一層左様いふ念が浮ぶ。先づ旅籠屋料理
店などの座敷の造方を見ると、大抵茶座敷風に出来て居る。自然
寂た澁い趣のあるのは争はれぬ。東京ならば煎茶櫻湯で済ます
べき場合にも、彼方では恭しく薄茶を捧げ來ると云ふ具合。鳥渡
料理屋などへ往つても、酒の前に薄茶が出る例が幾等もある。薄
茶が出るから澁いと云へば、洒落のやうにも聞えるが、總て恁い
ふ心地で萬事が行つてゐるから、其邊に使つて居る道具なども、
寂のある澁い物に富んで居る。鳥渡旅店の烟草盆の隅にも、東大
寺の瓦を摸した香合などが載てゐて、縦しや安物にもしろ、香が
備へてあると云ふ風、貶して評すれば、悪く氣取る所だとなるか
も知れぬ。寂た趣や佗の態を通り越して、惡氣取に落ちたものも

少なくは無い大佛前の草鞋屋と唱へる料理店の招牌に、藁草履
 を竹杖に刺して懸けてあるのや、南禪寺の瓢亭の入口が駄菓子
 屋になつて居るなどは其の一例であらう。これと共に故實がり、
 有識がり、骨董がる癖も色々の物に附いて廻るやうであるが、東
 京のやうに實用向に偏して居るのから見ると、何となく床しく
 趣味が多い。鳥渡した所で、茶屋で出す徳利にしても、東京のやう
 に出来合ものは使はぬ。勿論窯業の熾んな地だけに、詭への自由
 が利くからでもあらうが、各店その家の意匠に成つた、雅致のあ
 る色や形を工夫して造つたものを出す。草鞋屋は大佛前といふ
 因から、彼の國家安康の文字で豊徳二家の不和の動機に成つた、
 大佛殿の梵鐘の形を摸した土瓶を使つて居るなどは面白かつ
 た。其外八新にしる、平野屋にしる、大抵の所は意匠を凝した徳利

を出す。此等の物までも濫い寂た所を具へてゐるのは妙である。
 又茶屋などでは電氣や瓦斯を用ひず昔ながらの蠟燭を使つて
 居るなども、同じ感を起させる。この趣味の高尙な方の代表とも
 見るべきは、上加茂、下加茂、兩神社の境内と、永觀堂、若王子神社邊
 の森閑として木立物ふりたる景色であらう。

赤い色の京都

上方は濃艶した粧飾を好むとは、誰も云ふ事であるが、其れに違
 ひない。京都人は赤色を好む癖の著しい事は直に目に着く。先づ
 敷へあげれば、男持女持の別なく、扇の骨が大抵朱塗になつてゐ
 る。團扇の柄も同様に朱塗。衣紋竹までも同じ色をして居るのが
 多い。家の壁や柱や椽その他を真赤に塗るのも、杉箸を薄紅に染

めるのも却々多い唇一杯にべつたりと紅をつけるのも其一例。舞妓の風俗の赤い物づくめと大極殿の碧瓦朱楹煥然目を射るのところが遺憾なく代表爲てゐる。

陰氣で暗い京都

山紫にして水明か松は翠にして砂白き地であると評判の高い京都を陰氣で薄暗いと云ふのは嘘の様にも聞えるが事實一面は其れに違ひない京都の山水は明媚であるけれど京都の市街と屋内とは極めて陰氣で薄暗いのである。先づ街道が何處も一體に極めて狭いのに家が立込んで居るから何うしても陰が多くて暗い其に三條四條五條乃至七條の停車場のある邊の主な通を除くと大抵例のむしこ造と云ふ家屋の構造で目の甚く込

んだ格子を張詰めて此の格子を濃き栗色に塗つてゐるから溜らぬ奈何にも陰氣で薄暗い心地がする。稀に店を開いて居る家も紺の長暖簾を殆ど店一杯に懸渡してゐるから是れも頗る暗い陰氣な感を増させる。京都邊では明るい家には金が溜らぬと云ふ俚諺があつて之れを堅く信じて居るから明るくされる家を態々暗くするとの説も聞いたが全く左様かも知れぬ。素人屋は勿論の事旅籠屋でも料理屋でも故意に座敷を暗く陰氣に拵へたらしく思はれるのを多く見た。充分日光を取るの餘地のあるのを態々壁にしたり此の方面には縁を廻して開放に爲たらば東山の景色も眺められて、晝居心地が快からうと思ふ二階座敷の一方に眞の日光取りの小さな窓を切ると云ふ風お負けに袴々と簾を垂れ掛け、爾々醜陶しく氣の沈むやうにする甚だし

きに至つては、廣々とした庭の其所彼所に建てた離屋にさへ軒近く樹木を植茂らして、非常に陰気な暗いものに爲て了ふ。八新の座敷などは其の好適例である。殆ど日の目も見せぬ程にしてあるには驚く。梟や土龍でもないのに、京都人は何故斯う天日を恐れるのであらうか。一つの疑問として考へる。價值はある。或人は此の疑問を解くに、保元平治以來屢々兵馬の爲に蹂躪せられて怯氣が附いた結果で、總て包み匿さうと云ふ考へから、むしこ造りも起つた家を暗くする事も習慣になつて來たと云ふ。或人は又延暦遷都の市制が兩京九條三十六坊百五十保六百八町といふ數に配して井然と碁盤割に爲た。一町の内は四行一行の内に八門(即ち一戸)一門の長さ十丈、弘さ五丈と云ふ劃一の制定であつて頗る細長い家の組織であつた。以後幾多の變遷があつて、痛

く其の當時とは異つては居ようが矢張りその系統を引いて、京都の町家は一町裏合せに二軒割といふ風で、甚く細長い。因で自然光線の通ひが悪くなるのであると云ふ。併し此の説は故意に暗くするのを説明するには足らぬ。更に説を爲す者は、京都は葦葎の地であつて、屢々街を御通輦になる事もあらせられるから、見苦しい町家の内部の様を蔽ふ爲に例のむしこ造りと云ふ。樽陶しい構造にさせたので、又屋内より御通輦の様を覗くといふ不敬のないやうにとの注意からも彼の細く込んだ格子造りに成つたのであるとも云ふ。併し是は正面だけの解釋にはなるが、何故裏二階や離座までを故意と暗くするかと云ふ理由を示すには足らぬ。更に此の問題に對して美術的觀察から説を爲す者がある。曰く京都の家屋の構造が何故那のやうに虫籠式で、隱居

的籠城的で而して墨入代赭めいた色で格子を塗つて總て陰氣にして丁ふかと云ふに其の原因を歴史の上求めて保元平治以來戦亂の頻繁であつたのに歸する説は一應面白くも聞えるが爾ではあるまい其の證據は保元平治以前平安朝の極平和であつた頃の古い繪巻物を見ても今日の家屋の構造法と大差はなく特に其の正面など能く似て居る矢張代赭色で塗つて居るから原因はその前にあると云はねばならぬ自分の考へには京都の地は御承知の通り花崗岩に富んで地には石英雲母長石を多く含む且つ雨量地味氣候の關係から草木の色は極めて麗しい因で青障白砂の趣は實に人の目を醒すばかりである此の餘りに冴過ぎた緑色と眩目いやうに煌耀する地の色は日本人固有の趣味には此の儘では合はぬかも知れぬ此の煌々なる景色

の中に家屋の方も明い陽氣な活氣のある花かな色彩を施す事になつたら日本人特有の寂だの澁いのと云ふ雅致は終に破却されたかも知れぬ因で自然界の極めて赫奕かな所を建築の方の陰氣な沈んだ調子で好い具合に光澤を消して日本人の趣味に適ふやうに爲たものかとも思ふ現に古い繪巻物などにも冴た緑青を使つて圓い心地のよい山を描いて其の下にくすんだ濃い代赭で建物を彩色したのを見る是れは餘程面白く感じられる畢竟唐式が日本化されたのが今の京都の市街であらうと云ふ是れも一説として聞くべきである今俄に此の問題を決する必要もなく輕々しく斷案を下すべきでもないから他日改めて出直す事にする。

小綺麗な箱庭的京都

京都を小綺麗で箱庭風な所だと評するのは誰も直に頷くであらうと思ふ随つて弱々しい細々した所も自然に伴ふのは争はれない先づ景色の方から云つても山には崔嵬とか巍峨とか嶒嶒とか形容される物は無く三十六峯概ね温乎と圓い小綺麗な許關東や東北に見る削成したやうに聳える壯觀は見られ無い其の代形と云ひ色と云ひ實に美しく可愛らしい所は京の舞妓其儘である洋畫家安藤仲太郎氏の説に眞實の緑色の山を見るには京都に來なければならぬと云つた草木の色も其通りである水から云ても汪洋とか淼漫とか評されるのは無く加茂川大堰川を始め白河にしる高瀬川にせよ概ね清淺でしよる、

ちろ、流れるので實に澄徹晶瑩鬚眉を鑑すべしである此の中に住んで居る魚を見ても小な可愛らしい物許加茂川の名物驚不知は申すまでもなく鮎や鮓と云ふ類ばかりで大きな魚は一向に取れぬのである木を見ても非常の大木はなく松などは富んでゐるが瘦たひよる、爲たのが普通で山や川に相應して居る東北地方に見る丈の非常に高く枝の非常に長く靡いた類は皆無と云つて宜い枝の短い縮んだ黒松が到る所の山に雅致を添へて居るのも頗る京都の特色を發揮爲て居る街道の狭くするしいのや家屋の軒は低く一體の建築が纖弱に出来てゐるのも亦此の特色に適つた物だ無論神社佛閣は例外である風俗の方面から觀察しても萬事小綺麗で細々した所は用意周到である今は髪形は殆ど東京化して居るのであるが彼の京鬘

なる物は能く其の小綺麗な細々した所を現して居る全體の風物から風俗まで小綺麗な箱庭式である事は明かに見らるゝ物産から云つても都扇でも四條人形でも西陣の織物でも清水焼でも何れ逃れぬ小綺麗な織巧の特所を持つて居る。

のんきな京都

東京から京都へ往つた者の著く感ずる一つは何となく一體の調子が暢氣な趣のある事で重なる東西に通ずる街道の外は大抵鎖店屋風の家で種々の老舗や問屋も例の嚴重な虫籠造に成つて店頭では商賣をせぬから外から馴れぬ者が見ては一向商家とは思はれぬ因で元來往來も餘り賑かでないのに一層淋しいやうに思はれる南北に向つた通などは殆ど片田舎の驛場を歩

いて居る様に思はれる既に市内は恁いふ静な所であるから自から人に暢氣な感を惹起させる譯だ其れに何方を見ても青々とした山が近く見える益々左様いふ心地がする鳥渡他から往つた者さへ此の位に感化を受けるのであるから此の地に生れ、此の地に育つて人と成る者は深く其の影響を被つて居るであらう争はれ無いもので色々の方面に此の暢氣な趣が現れて居る新京極とか四條通とか云人の熾んに雑沓ふ所で車や馬が後から聲を掛けても往來の人は一向平氣で急いで避るの振向くなど云ふ事をせぬ車夫の如きも極めて徐々と駈けるので馴れぬ者には齒痒くなる旅籠舎や料理屋の女中を見ても客が手を鳴らすからといつて敏捷く梯子段を駈上るのは無い間の伸びた返事を爲て緩々と一段づゝ考へゝ上て來る様に見える。

是れに善く釣合つて居るのは荷車だ形からして暢氣に出来て居る丁度小形の梯子へ車を附けたといふ鹽梅式に細長く轆と云ふべき物は棒の如く唯一本突出て曳子は是れに摺まつて肩へ糸繩を掛けて轆くのである暢氣の代表とも稱すべきは彼の八瀬や大原から出て来る盤臺を頭へ載せた女の風俗であらう。説明する迄もなく世人の皆知る所であるから詳しくは云はぬ妙な事を唱へるやうであるが大坂でも左様云ふ感を起したが、特に京都の婦人は黙座して居る時、抵ぱツくり口を開いて居る風がある。是れは藝者や舞子に於ても大に然りで物に見惚れて居る時などには、其れが頗る烈しい様に見受けたこれも何處か暢氣な點が心にあるからであらう。商店の招牌に三尺餘の長提燈をぶら／＼吊してあるのを見ても、何うやら暢氣らしい詰り

餘裕があるのだらう。

節儉な京都

大阪邊の人、京都者を罵つて「豌豆を食ふのにも袖口を捲くる所でおます」と云つて居るが、豈夫それ程でも無からうか。併し、關東の者の眼から見れば、多少驚かれる事もある必ずしも吝嗇とは云はれぬ。宵越の金を使はぬを以て名譽と爲た人物の住んで居る東京の浪費主義も決して中道を得たものでは無い。之れを定規として罵るのは無論酷な話で、寧ろ京都人は節儉家である。と評するが適して居るらしい。經濟の點には用意頗る周到であるから、鳥渡變にも感ずるが考へて見て中々穩當と思ふ事も頗る多いのである。自分の狭い見聞の中では、吝嗇の部に屬する方

よりも節儉と目すべき方が多い様に思はれた。無論中には可厭な感を惹く事も恐縮爲たことも有つたに違ひ無い。京通某氏の話に京都の町家では立派な家でも、一週間に一度乾魚を食ふのが一番の御馳走で、平日の副食物は先づ獅子蕃椒を普通と爲て居ると云つて可いと説かれた。粗食の極が顔の色が蒼白くなつたので、京人の色の白いのは本物でない、病的だ。鴨河の水が原因でなく、茶葉許を多食する結果だと罵つて居られた。が、是は甚だ貶し過ぎた説に違ひない。儉約つて居る例の二つ三つを擧よう。旅店などで香物を出すにも、膳には附けず段組と稱へる丈一尺ばかりある圓形の三段程に成つて居る棚の如きものへ、段毎に圓い穴を穿ち、之へ井を箝めて持出すのである。此の段組の井には色々綺麗に並べた香物を入れて在るのだ。何時取分けて呉れ

るのであらうかと待つて居ても、一向その氣振も無かつた。睨め鯛と云ふ物があるとは聞いたが、睨め香物といふのもあるので有らうかと不審に思つた。飾物であるのなら、寧ろ見つけに出して呉れぬが可いと念じた。飯の度毎、女中の坐る後の方へ、式の如く丁と例の段組が飾られる。懲へかねて「それを一つ呉れぬか」と請求を爲た。請求をすれば、叮嚀に取分けて呉れるのであつた。之れを關東の疝癩流に解釋すれば、籠棒奴何だい、吝な眞似をするぢやア無いかと成るのであるが、靜に考へて見ると、爾罵るべきでは無い。香物は由來人々に依つて非常に好嫌のある者。澤庵が膳に附いてゐては、奈何旨い物が他にあつても、箸を取る氣は爲ないと云ふ人もある。因で宜しければ差上げませう、お嫌ひなら召上がるな」と云ふのが、段組の趣意である、と解釋すれば難は無い。

且又經濟にもなるに違ひ無い第一氣の弱い客は唯まぢり、眺めて請求は爲まい、通例の膽を具へた客に爲ても、實際食ふ丈よりは請求も爲まいし、食荒しを遺されると云ふ患も無い。選擇の自由があるから客の受も好い譯である。此の段組の上には提げられるやうに、銅の鑲があつて此の脇に錦手の焼物の熨斗が載せてある。鳥渡これも解りかねた始めは何でも上方は客な所と聞いてゐるから、紙や何かの熨斗では長く使へぬから、陶製に爲たものか考へたものだ、と内々可笑しかつた。一體又香物に熨斗を附けて出すと云ふも、其の意を得ぬ事であると疑つた。宿料以外の景物であると云ふ謎であらうか。例へば牛屋や鳥料理では通物と云ふがあるが、其の格であらうか。併し旅籠屋の賄ひに通物附といふのは珍の極であると感服爲た。然るに其の焼物の

熨斗が小楊枝の容器と分つては何の充らない可笑くも何とも無い譯である。併し之を菓子盆へも添へて出す。楊子入と熨斗の兼帯と云ふ所に聊か京都氣質の現れて居る所は嬉しかつた。菓子皿の話が出たから序に云はう。京都の宿屋では東京の様に客に出した菓子を、其の口切に下げて、残物は勝手の役得と爲て了ふのとは頗る譯が違ふ。鉢の中に残つて居る羊羹の乾枯びる迄も、決して客に命じられない限は、取下げて了ふと云ふ事はせぬ。且用意の周到である事は、始めは大な容器へ盛つて來た奴が追々残り少なくなるに従つて、丁度その分量に應じた小さい容器に入れて、五日でも十日でも食いつくすまで据置くのである。自分の方でも儉約つて居るから客の物をも疎末にはせぬと云ふ、其心掛は結構である。此等は客齋ではなく、節儉の美德を守るもの

と云ツて可い襦衣や單衣の洗濯を頼んでも、其の紛失や間違のないやうに、丁と客の名の頭字を黒い糸で刺繡を爲て、之を標章とするのなどは、能く京都人の細心なる特質を現して居る。車の膝掛に狭い紺の風呂敷めいた薄い物を用ふるのや、雨の日は是をすら剥奪して了ふ事などは、恐縮の方である。祇園の藝妓とも云はるゝ者が、二錢五厘位の安手帛を振閃めかして耻とせぬのみか、之を膝に掛けて、酒の汚點をびくびく者で防いで居るのに至つては……襦袢の袖で三味線の掉を抑へるのは、艶なものであるが、此の二錢五厘の白帛を代用にするが如きに至つては、言語道斷であつた手を出すには、袖口の摩れるを怖れ、體を動すには裾の剥けるを考慮して居ると云ふのでも無からうが、何しろ怠惰で、上品がつて殆ど動かないのを得意にして、泰然自若

たるは呆れる外は無い藝者であるか、床の置物であるか、區別が附かぬ。此に面白い話がある。京都に遊んだ人は、能く知つて居ようが、祇園神社の入口に、奈良東大寺の山門にある古式の高麗狗を摸して、却々巧みに出來て居るのがある。口の悪い友人は、此の高麗狗を見て、何うしても京都の藝者は、此の姿に違ひ無い。妙に反つて、胸を突出して、澄し切つた形と云ふものは、實に生寫である。と云つた。成程左様云はれると、此の悪口は頗る形容し居て妙である。参考の爲に寫生の圖を示すと、妙であるが、それにも及ぶまい。序であつたら、實地に就いて、此の説の能く眞を穿つてゐることを驗すべしである。袖の破綻を恐る爲でもなからうが、藝者の袖の留に、毛滿の小さいやうな形に、糸で留を打つてあるのや、素人の赤や淺黄の切で留めてあるなどは、經濟か飾か、習慣

かは知らぬが、餘り見よい物で無い。舞子の袖に縫揚を爲てあるのなども、贅澤を誇る爲だとも云ふが、京都氣質の變形で、矢張感服されぬ筒條の一つである。立派な紳士が着物の汚れるのを氣に爲て、膝へ手布を載せて鳥を食ふのや、裾の切れるのを恐れて、美人が尻を捲くるのなどは、甚だ美でない。序でに美でないのは、取附の欺騙し帶で、痴人を威す事である。東京では兩換屋の招牌が小判の形であるのに、京都では是が四文錢である。此の位東西の氣風が違つて居ると、力んだ人もあつた。餘り確論でもないが、幾分か那樣趣もあるらしい。

面白い話を聞いた事がある。京都では七條の停車場邊へ降りた客の中で同じ方向に往く者には、至で知らぬ者を捕へて、合乗を勧めると云ふ。是れは申す迄もなく、勘安になるからで、勧められ

たる客も怪まらず相手はよぼくの婆さんにしる。娘にしる若い細君にしる。一向關はず、知らぬ同士が合乗をするとの噂。理窟から云へば、馬車や蒸氣に乗合をするのも、人力車に合乗をするのも同じ譯であるが、我々には頗る可笑しく感じられる。最初は豈夫と信じなかつた然るに、一友人が實際或見知らぬ年増と合乗を爲せられて、頗ぶる弱つた事があると云ふのを聞いて、事實爾であるかと驚歎したのである。果して左様でねれば、随分節儉屋も過ぎたりと云ふべしである。若し夫れ他の若い細君など、偶然合乗をすると爲れば、飛でもない嫌疑を受けぬとも限らぬ。間男見つけたと相手の夫に車から引曳りおろされて打擲されても一言ない話である。併し那麼患ひのない所が上品な暢氣な錢勘定に細い京都人の特色かも知れぬ。經濟思想の周到である他

の一例を擧ぐれば京都人は料理屋へ往つても露物の外には大抵箸を着けぬのを堅氣な人としてある因で他の料理は残らず折詰にして宿への土産に提げて歸るといふ風東京では彼奴も尤う折を提げて歸るやうに成つたから焼が廻つたに違ひない」と侮蔑する所變れば氣性も恚違ふものかと驚かれる茶屋酒を飲むにも京都では食ふ事と遊ぶ事とは別箇にして遊ぶ時には花菱と稱へる砂子煎餅式のものや噛ッて藝者遊びをする時には夏蜜柑などを摘で遊ぶ事もある遊びにまで斯う締つて居るから萬事は知るべきのみであらう大阪も此の點は略似て居るらしいと云つて無闇に京都を貶して關東のづぼらを稱讃する譯ではない京都の如き地は矢張節儉を勵行しなくては立往かぬ境界にあるものと信せられる開港場のやうに泡銭の入る望

みはなし土地は狭し物産と云つても工藝品が稍熾んな位であるから自然生存の必要上今のやうな習慣を形成したものであらうと思ふ。

淫靡なる京都

京通某氏が「京都は抹香と白粉でかためた所だ」との警句を吐かれた實際京都を維持して居る勢力は寺院と妓樓とに在る事は争はれぬ特に其の白粉の勢力はすばらしい者で京都財源の主なる一は確に烟花場裏から流れ出で、土地を潤して居るのだ。短日月の間の見聞であるから詳細の事實は知り得なかつたが、零碎の觀察を綜合し土地に熟通して居る人々の談話をも參酌して考へると幾等か裏面の實情を窺ひ得たかとも思ふ先づ京

都の街上を通つて驚かれるのは、日中と雖も賣女と合乗して得意氣に俥を驅る者の頗る多い事で、「幌もかけずに頬邊押付け」と俗語の修正を要する醜態を屢々目撃するのである。單に恁る場合の需要に供する爲許でもあるまいが、一體京都には二人乗の俥が多い。是れは無論經濟の方からも來て居よう。白日晴天の下、潤歩して茶屋妓家へ入り込むのを京の紳士は一向に耻ぬといふ。又藝者を引連れて、往來繁き市中を横行する事も、四條磧の納涼に藝者相手の痴態を橋の上から人に見下ろされるのも、少しも憚ら無い。寧ろ大々的に見せつけの態度を執つて、昂然として誇るが如き趣がある。此の點は東京の紳士が待合の忍び遊びを主とするのとは頗る行方を異に爲て居る。上方の人は蕩藥をするにも隠すと云事をせぬと云へば、世間の誹を氣に留ぬ、寛宏の風

がある度量が廣いとも解せられる。又暢氣で無邪氣な質のやうにも聞えるが、一般に其の實醜を醜とは思はぬ。世間の誹どころか、寧ろ世間は之れを羨む位であるから、東京の忍遊びを主とするのよりは、社會の制裁も、道德思想も、確に遅れて居るか、鈍いかに違ひ無い。京都人は美人を引連れて人に誇る事の出来ない奴は、世才と錢の無い儕輩に限ると考へて居るのだ。之れを見ても、奈何に淫靡な風が浸潤して居るか、分かる。何人でも京都と云へば、妙に膩粉の氣に聯想せられる。俗の諺にも「京女に東男」と云ふ位で、由來花洛の地は美人の驥北と爲てあるから、今日の淫靡な風を馴致したのも、聲の朗かなる者、羽毛の麗しきものが、常に羅絡の禍を遣れ得ぬ例に洩れぬと云ふ一面の理もあらう。罪の源が何れに有るか、俄に判断爲がたいが、確に外來の貴顯紳士と

云はるゝ人々が京都を一大淫樂の公開場視し、此に金を撒布らして所謂旅の耻を搔捨てに爲ようと企てた亂行の結果が京都の風俗に影響したのも決して尠少ではあるまい。京都の具眼者は恁云つて居る、奠都祭、博覽會、御大葬以來京都は世間に種々の點から廣告せられた。其の餘澤は今も續いて居るが併し是れと共に其の以後堅氣な娘の風俗を悪く爲たのも頗る大である。東京其の他から京都へ入り込む貴顯紳士は必ず先づ「京美人」を此の名物の一つとして愛玩する事を忘れぬ所が、身分の高い人々は花柳の巷に往來するのを幾分か憚かる所から、自然素人の中から月極者や高等淫賣を求めるのである。因で金には眼のない土地の氣風ではあり、柔順で美貌で頗る玩弄物には適して居るから、需要と供給とはピッタリ此で合ふのである。事既に此に

至れば全體の空氣が愈々淫靡に流れるのも自然の勢である。勿論外來の客ばかりが風紀を紊したとは云へぬ、其素因は此の地に有るからで、現に京都に居る某教育家の如きは幾等學校で訓誡して遣つても、家庭の方が腐敗して居るから、役に立たぬ。父兄が運動會の歸途に子弟を引連れて、妓樓に泊り込むと云ふ風であるから、と歎息を爲て居られた京都では相應の資産を有して立派に店を張つて居る町人の娘が、貴顯紳士の枕席に侍べる事を耻とせぬと云ふのも事實だ甚だしきに至つては、中等の生活に堪へる或一町内が殆ど全體娘に淫を賣らせる所もあると云ふ。貧の身賣と云ふのとは事違ひ、嫁入支度の淫賣と云ふ考へで、盛装して立現はれるから頗る驚く京の娘は鳥渡見は頗る温和やかで男に口を利かれても眞赤になるであらうと思はれるの

が多いが併し實際は却々男を恐れぬ凄しい奴に富んで居る事は嘘では無いらしい京通某が「阿嬢密賣淫」の熾んに行はれる理由を説明して云ふのに、京都の婦人は妙に獨立自營の考へが強く、一體男よりも女の方が働く風があつて、十二三歳の小娘の時分から親兄弟の手から小遣錢は貰はぬと云ふ心掛けである。因で花髪挿とか扇折とか鹿子結とか西陣の織子とか云ふ種々の方面に手内職を求めて自分の力で花見にも行けば、芝居も見、紅白粉から髪飾その他の小遣を家から貰はぬやうに爲る習慣が、久しい以前から有つたのだ。此の習慣が悪い方に發達して紳士紳商の盛んに入込むやうに成つた外來の誘因と根が徳操の考へが弱く錢儲には抜目ない性質とが絡みあつて忽ち中等社會の良家の娘までが貯金の捷徑は賣淫にあると覺り、靡然として

此の風を成すに到つたのである。云々と説いて居た。此の説明の當否は今俄に判断しかねるが、何しろ甚だ忌むべき習慣である。と云はねばならぬ。中京邊は例外として、其餘の京都から妻を迎へやうと云ふ人は、却々容易に安心して貰へぬ。飛でもない疵物を知らずに脊負込まぬとも限らぬ、と生粹の京都人さへ云つて居るから、滿更嘘ではあるまい。

伏見稻荷山の己の日に於る山めぐりの如きは、宛然一箇の大野合場を公開せると異ならざる光景を現し來たと云ふ。特に夜の十二時過の山めぐりは、醜態を極むるもので、夏の最中などは茶屋の仲居その他身柄の宜しからぬ若き女供が、半身衣を脱して雪の肌を惜氣もなく現はし、尻端折の緋縮緬の脚布を蹴返しつゝ、脛もあらはに群立て、山を駆めぐる間に若き男供と道連を

求めて、袖觸合ふを縁に卑猥の語を交へ、果は山上に豫て憊る者の爲めに設けられた待合に連込み、淫樂に耽るを習慣とする

云ふ。又東京には銘酒屋、矢場、恭會所といふが如きものは上方には多く見ざる、風紀を紊す場所あれども、彼方にありて、東京には絶無なる盆屋と稱ふるもの、京阪地方の淫靡なる風俗を説明するに足る最も強き左券である。此等の事情を知る者に聞くに盆屋とは最下等の待合業を云ふので、賤民等の野合所として設けられたものである。其の組織は入口の正面に梯子があつて、戸外から直に無断で二階に通られるやうに出来て居る。其の家の内儀や女中などに顔を見知られる患がないのを特色としてあるさうだ。因で素人の娘や他の女房などを連込む不義者は之れを至極

便利で、安全な様に考へるから、却々重寶がられてゐると云ふで、席料の徴收法はと云へば、二錢とか、五錢とか、張出があつて、歸際に備付の盆へ入れて来るのを例とする。盆屋の名は無論これから起つたのであらう。席主は客が門口を出ると同時に、二階に駆上がつて、席料の有無を調らべる。若し無ければ追駈けて耻を搔かせるると云ふ制裁があるので、決して規則に背くものは無いとの事である。何しろ東京も追々淫靡の風が盛んになつて往くが、尙京阪地方には及ばぬらしい。京都の山川の美が海内に冠たり得べしとすれば、京都の風俗の醜も亦日本に匹儔なしと云ひ得るに近い。佛教の根據地、美術文學の淵源地、同志社あり、京都大學あるの地でありながら、如斯く淺猿い有様であるのは、聊か怪むべきであるが、事實は何うも掩ひ難いのである。宗教家、教育家を

の他局に當る人々は憚る淫靡の風俗が京都の將來に向つて奈
何なる運命を誘致するかと云ふ事を熟慮せられたい様に思ふ。

京都雜觀(上)

▲京都は海に遠い山中の事故今は汽車の便はあれど、鮮魚には
乏しいと見え料理にも専ら河魚と野菜を使ふらしい京人の誇
る食物と云へば、若狭鯛(乾物)鱧の骨切、鯨汁、鯛の鯛づくり等云ふ
類である。料理鹽梅は一體東京のに比べて鹽が利き過ぎて居る。
因で東北生れの我々は勿論田舎者の口には却て合ふ方だ。不
の食物は錦の小路へ往けば、何でも直に膳に付けられるやうに
爲て賣つてあるから至極便利だ。東京ならば仕出屋を煩はす場
合にも下女を走らせれば、大抵の用は辨ずる。色々變つた食物も

あるとの話であるが、滞留の日數が短い爲に、充分味ふの機會を
得なかつたのを遺憾とする。

話に聞いた丈であるが、平民的料理店の古風なのに、花遊軒と云
ふのがあつて、此所の名物に芋棒といふ妙な椀物があるさうだ。
是れは芋の大丸切へ棒鱈を入れて煮たのであると云ふ。又梅椀
といふ一種京風の薩摩汁に似たる物も看板になつて居るさう
だ。此の花遊軒は東京で云へば笹の雪とか揚出などの格で、一人
前僅二十五錢か三十錢にて支度の出来るのを賣物として、客の
多數は祇園の朝歸であると云ふ。捻つた所では、南禪寺前の瓢亭
とか大佛前の草鞋屋とか云ふのである。八新の如きは先づ八百
善と云ふ所だ。又丸山の平野屋や中村樓などは先づ此方の常盤
屋、鑑清と云ふ格であらう。詳細の事は一々實驗せぬ事故省いて

置く。

▲京言葉の事を云へば際限もないが始めて往つた者には今更の様に耳新らしく聞き爲されて解し悪いのも多い湯や茶をぶい」と云ひ着物をべい」と云ひ此方のぼつくり下駄をこぼし」と言ひ日和下駄を利休」と稱へ庭下駄を駒下駄と呼び駒下駄を引摺りと云ふ類は實物を見ねば頓と分らぬ隠元豆をとうろく豆、白瓜を麻瓜唐瓜を鴨瓜蕃椒をなんばと云ふ髪の方でも分り悪いのがある銀杏返を蝶々」といふの類又お鉢をお櫃并をお鉢、竈をくとこれは古語の尙存するものか水板をはしり鼠不入棚を不入棚と云ひ田舎べいと云ふべきをば田舎べい又京都の花柳界の隠言葉に百姓を輕蔑する時に三十三の四十性と云ひ、東京では接吻を温かいお刺身と云ふが京では之れを北山とい

ふ北山といへば東京では空腹の事を意味するのであらから此の語を誤用して非常に笑はれた者もある源助といふ言葉は一般に行はれて失敗つたとか締つたと云ふ所に用ひられる此方でお生憎さまと云ふのをえらうどんな事とす」と云ひ歸る時に「お出やす」といふ。

▲所謂名物の中では祇園の香煎聖護院の八橋大佛餅大徳寺納豆清水寺のといろき餅など他に多くわらうが知らず。

▲迷信の熾んな事も決して他の地方に譲らぬと見え大抵の家の勝手元の棚には大小新舊の達磨が夥多行列して居るのを見る是れは毎年の正月伏見の稻荷から延喜の爲に買つて來るの互に大と多とを誇つて家繁昌の呪詛であると爲てある大原の御香水と稱へて性の知れぬ道側の濁水を態々儲詰にして取

寄せ、腹痛の妙薬として之れを飲む人が頗る多い。赤山神社に参詣すれば、月の拂ひが能く取れるとか、三宅八幡の御符は子供の蟲除に特效があるとか云ふ類の有難連の多い事も、京都の一特質であらう。勿論この點は東京も決して負けはせぬ。

▲商標の變つてゐるのを舉げれば、細長い大提灯が堅氣な家の店頭にぶら／＼吊されてゐる事が第一で、牛屋の看板に「滋養藥喰精肉しき焼」とあるのは京都の特色を現はし、且町名の長いのと競ふに足るものであつた。蕎麥屋の麵類と爲てゐるのは要領を得たもの、新京極の寄席の看板に、細長い角の硝子行燈へ赤文字で浪花ぶしと書いたのがあるは牛屋と間違さうであつた。

▲總體京人は大に茶氣があるにも似合はず、着物持物には極めて金ぴか物を好むは不思議である。鱒のお化見たやうな若旦那や

紳士紳商を見るのは不斷である。自分には目撃するを得なかつたが町家の若旦那連などの宮詣の打扮と云ふものは實に刮目すべきもので、先づ各自薄化粧を凝し、尻に鳥度紅をさし、見々物の服装、衝袖の反身、雪踏ちやら／＼と云ふ姿宛然芝居で見ると、若旦那その儘であると云ふのは驚くべしである。

▲聞いて床しく見て、喫驚は音羽の瀧の軒の雫に似たと加茂川の草原石原に蔽はれて水の極めて少いのである。其れに疏水工事落成以來は加茂川の晒しも四條磧では白くならず、今は出町橋下丸太町橋の間へ移るやうになつたとの事である。京人は能く此の鴨川の水を誇つて、美人の多い原因として居る。其の説明を聞くに、白い手拭を大阪の水で洗ふと、水溢で茶色になる、其れを京都へ持歸つて、鴨川の水で濯ぐと眞白になる。此の位に

利く薬水を産湯につかつて育つたのだから女の色白く膚目細かに、肌光澤のあるのも自然であると云ふ併し其の實鴨川の水は塵芥流れ盈て、一口も飲まれる物ではない。決して之れを飲んで居るものはない。先づ洗濯をするか、撒水に使ふ位のものに過ぎぬ。されば鴨川の水を飲だから色が白いと、は眞赤な嘘であつて、美人の多いのは他の原因であらう。勿論水の系統論は別問題である。

京都雜觀(下)

祇園會を自分の見たのは十七日の前祭の方であつた昔からの名物だけあつて、却々面白く賑かなものである。十六日の夜宮かち、所謂祇園囃の音は浴中に響いて、暢氣な調子の中に、氣の勇む

趣もあつて、悪くはなかつた。俗の諺にも「祇園祭は娘と屏風が一番の見物だ」と云ふ通り、生粹の京美人を見るには此の時を外しては、花見時位のもので爲てある。京都の良家では、滅多に娘を戸外に出さぬ習慣があるので、不斷外來人が京美人として見る者は賣女以外には出でぬと云ふ所が、賣女になる位の奴は、身柄の賤い者が多数であるから、眞の京美人を代表するには足らぬ譯で、往々京美人の名の高い割に、其の實これに適はぬとの評も出る。のであらう。公平に云つて、東京に比すれば、全く美人に富んで居るその實例は、祇園會の來觀者に就いて始めて驗し得たのである。五歩に一人、十歩に一人、屹度目に着く位の婦人を見る。却々東京などの及ぶ所では無かつた。勿論、京都の者は何となく奇麗ぢやア有るが、妙味のある顔が尠ない」と云ふ評の強ち棄られぬ

所もあるが併し、艶麗い婦人に富んで居る事は確に争はれぬ。唯その顔状が東京とは違つて、頬の豊かなふつくりと爲たのが、大多数を占めて居る。此が東京の人の趣味には或は合ひかねる點かも知れ無い。其の修飾が一體に濃艶過ぎるから、往々細工に落ちて却て美態を損じて了ふ趣も亦無きにあらずだ。何しろ祇園會を飾るの花は、鉾山でも、金屏風でも、満都を不夜城に化して了ふ飾提灯でも無い。盛装の娘子軍のからこると練り歩くのが、全くの花を添へるものと云つて可い。偕祭禮の模様を一々述べると、色々云ふべき事もあるけれど、鉾の種類や後帳の由来や、稚兒の服装に何百圓を費すとか、音頭取の消防夫が意氣な扮装で車の鼻に突立つて妙な聲をする、那を音羽屋に演らしたら宜からう、など、云ふ細い事を數へたら際限が無いから略して了ふ。

家々の店頭には毛氈の敷詰め、秘藏の屏風を飾つて、知己親戚の來觀場にする。此等の屏風の中には頗る美術上の逸品とするに足るもの多いと聞けど、精細には廻覽爲ないから知らぬ。雜壇を見るやうに、色々の人が店頭に、金屏を後に居並んだ様は面白かつた。中にも大原邊の女が例の張出た髪に姉様被に似た風に、手拭を冠つて、幽禪幅廣の襷を綾取り狭い帯を前に結んで坐つて居る。其の側には、十七八の丁稚が削立の罌粟坊主頭を二顆並べ、其のまた次には京搦うつくしく、牡丹花とも見える盛装の娘が居るのを見た。その對照の妙を極めて、却々奇觀だつた。

●寡は衆に化される、境遇は人を移すの理は大抵の場合に當筈る。獨り京都人が他から來た移住氏を同化して了ふのを怪むべきで無いけれども、特に京都人は同化力が強いと云ふのは争は

れぬ事實である。現に自分の知ッて居る人々の中でも東京その他から移住して兩三年を経た許りの者も數人ある。彼等は此の短日月の間に舉動言語思想まで悉皆京都化されて了ッてゐた。此等の人々の説を聞くに始めて當地へ來ると種々癢に障ることが多いので、最初は盛んに罵ッて居た第一吝嗇なものには呆れたし、又冷淡で薄情なものにも憤慨した。併し居馴て見ると存外住好い所だ。懇意になッて互に心を知り合と、却々深切で情の濃かな所もあッて頼しい心地をさせられる。遂此所が戀しくて離れられなくなる。京都は節儉を重んずる風があるだけに、何れも外見よりは内福である。深く事情を知ッて見ると、東京などよりは遙に穩かな生活を心靜に送られる土地であるから、自然郷里へ歸らうとも思はぬ」と云ッて居る。是れは確に一面の事實であら

う。或人は京都を評して、隱居所には尤も適した地であるが、活動の場所ではない。長く京都に住むと、何時の間にか進取勇往の氣象が消えて了ふ。恐しい魔力の潜んで居る土地だ」と云ッた。是れも他の一面の事實であらう。兎も角、京都は平和な奇麗な小天地で、一旦住馳れたら離れるに惜い程、人を引着ける特所があるに違ない。人情も表面から瞥見したよりは、深く交際ツたら、存外悪く無いのかも知れぬ。唯久しい昔から開けたいけに、他國人に對して決して油斷をせぬ、要心堅固な所があるから、薄情のやうに思はれるのは已むを得ぬ、といふ説が眞を穿つものらしい。斯ういふ點は、長く居て實驗爲て見なければ、輕々しく斷言の出來ぬ問題である。

第三、洛外の探勝

京都の名所舊跡は數限りない。短日月の滞在中には十が一だも見る事を得なかつた。祇園清水、知恩院、金閣寺、銀閣寺、南禪寺、永觀堂、若王子神社、北野神社、大徳寺、黒谷、兩大谷、鳥部山、東本願寺、平野神社、上加茂、下加茂、伏見の稻荷など、名高き所は概ひね瞥見した。けれども、既に世人の浴く熟知する名所ではあり、此等に關する古今の著述や紀行文は實に汗牛充棟も管ならぬのであるから、今更屋下屋を添ふるの愚を敢てするにも及ぶまい。因で、洛中の名所舊跡は世に刊行せられて居る案内記に譲つて、何も云はぬ事に爲た。

宇治

小雨降る日、七條停車場から瀛車に乗つて、淀、桃山を過ぎて宇治の里に遊んだ。宇治の名は何となく、詩興を伴ふやうな響がする。と云ふのは、茶の産地で名高く、平等院の鳳凰堂は在り、佐々木四郎信綱が養和の昔此の所で先登の譽を揚げ、源三位頼政が埋木の歌を遺して白刃せる扇芝の尙存する地で、河原の左大臣や藤原の道長等の古蹟も在り、螢狩では詩歌俳諧にも歌はれ、朝顔日記にまで引合に出されて、人口に膾炙爲て居るからであらう。汽車が桃山驛を過ぎて、平和な田舎道を駛せ、左には宇治川を遙に見下し、右には斜平な張落の形面白き丘陵の松寂びて、岩露はるる小山に續くを眺めた。際涯なき萬頃の茶園は雨に濡れて翠色

滴らんとする其所彼所に、壁白き小舎の夥多散在して、路傍の竹林の間より隠見する状一種云ひ難き佳趣を覺える。惜い事には摘芽の季節でないから、茶摘唄を聞くの風流を味ひ得なかつた。右に黄檗山の巨刹を見すぐし、宇治川の鐵橋を渡つて、直ちに宇治町を着した。晝餉の支度に、菊屋の二階に座を占め、欄外の眺望を縦まに爲た。直軒下を流れる宇治川の碧流に、鮎舟夥多浮びて、篋笠の翁綸を垂る、彼等の岸には、老松亂立ちて、翠光波色と相映じ、何處の炊烟であらう、横抹搖曳する邊より朝日山を望む、風景別に奇なくして、爾も雨中の江山人を飽かしめず。朝ぼらけ槇尾山は霧こめて宇治の川長舟よばふなり。の趣なきにしもあらず。だ。食後平等院橋姫神社等を廻覽し、橋を越えて山吹の名所と聞えた興正寺に詣うて、歸途朝日燒の窯主を訪ひて、其の由來

を尋ね、秀吉が桃山城に數寄を盡せし頃、此の川水を茶の湯にとて、態々汲ませたる折に使つた、釣瓶の型を摸したと云ふ、俗につぶれ形(釣瓶形)の茶器一組を買つた。抹茶々碗一枚にて五十圓百圓と云ふ品もある。一切言價よりは引かぬと大氣焰を聞かされて、京都に歸つた。今朝日燒の由來略記を得たれば、左に掲載する事に爲た。

我朝日燒は宇治名産に冠たる古來著名の陶器にして、今其由来を尋ぬるに、遠く聖武天皇の御宇、行基菩薩に創まる、菩薩隨從に板野正則と云ふ人あり、始めて此地にて陶器を製せり。之を陣幕燒と云ひ、又其窯の大香山の麓なるを以て、大吉燒とも稱す。其窯跡今尙遺れり。爾後世の變遷に因りて、久しく跡絶えたりしが、貞應の頃、加藤四郎兵衛といふ人、興聖寺の開祖道元

禪師に隨ひて宋に渡り、陶器製造の業を習得し、更に安南交趾に行きて其蓋奥を究め、歸朝の後諸國の土質を試み、宇治朝日山の土質、安南交趾に類し、且行基菩薩の遺跡なるに由り、乃ち窯を此に設しに果して淡色を帯びたる雅品を得たりとぞ。四郎兵衛は所々に盛んに窯業を起せしかば、今も尾州瀬戸に加藤氏を稱する者多きは是に因る。降りて文祿年中、奥村一夢の子孫に藤作と云ふ者ありて、製陶に巧みなりしかば、豊太閤命じて、茶器を造らしむ。藤作即ち此地に窯を設けて之を製せしに、深く愛翫に適ひ、命じて名を陶作と改めしめ、家祿を給はり、又親ら窯場巡覽せられし事あり、遂に後陽成天皇の敕聞に達し、柴船形香爐を奉獻したりと云ふ。後、小堀遠州侯、太く名跡の湮滅せんことを歎惜し、良工を選び、自ら意匠を凝し、之に授け

て茶器を製せしめ、且朝日の二字を自書して之を捺用せしむ。世に之を朝日焼と稱し、碾茶盃にては、最籠目高臺に注意し、頗る優雅を極む。窯は侯の築く所の日本五窯の一也。其後またまた廢絶せしを、文久元年、予が祖父松林長兵衛陶作が裔孫なるを以て、緒紳庭田家に謀り、遺跡を興して祖業を繼ぎ、古雅の精品を製出し、朝日焼の名再び世に喧し、予少時より斯業に従事し、日夜意匠考案を凝し、其雅趣風致に於て良々得る所あり、幸に江湖の愛顧を受け、屢々博覽會共進會等に出品して好評を博し、賞狀を得るに、と數次、明治三十一年一月六日、皇太子殿下、宇治行啓の時、畏くも我窯場に臨ませたまひ、御買上の榮を得たるのみならず、窯主謹んで茶器の製造を御覽に供し奉つりしに、伏見宮親王殿下、親しく奨勵の令辭を下し給ふ實に無上

の光榮と謂はざるべからず。茲に其由來の大要を記述するに
方り併せて自今益々奮勵して此光榮に負かざらんことを誓
ふと云爾。

山城國宇治 朝日黨主 松林松之助

自分が管見爲た所では、宇治の景は宇治に無くして、寧ろ桃山に
在りと云ひたい。夕方、汽車の窓から宇治川を遙に見おろすと、大
なる水車が河邊に斜陽の光を帯びつゝ、旋轉して居た。遠く河岸
まで連なる茶畑のうねり下る丘陵を隔て、之れを見る心地は、
穩かなる中に妙味悉る無きやうに覺えた。成程これならば、裾襖
様の圖案などに、早くから水車が使はれた筈だと感じた。

嵯峨野嵐山

と標題は置いても、借何も書くべき事を見出ださなかつた京を
出る時に、宿屋の高足駄を借りて來たのが、花園停車場を下りて、
妙心寺から太秦寺へ往く途中で、ブツリ鼻緒を切つて了つた。其
れからは足を引摺つての跋躉旅行であるから、嵯峨のステーション
ヨンを降りてからも、軀が自由にならず、車に乗らうとしては、極
めて短距離なのを無法な云價で癪に障り、瘦我慢の果は足駄を
引摺りながら、嵯峨の驛を通り、松並木を抜けて、吐月橋まで辿り
着いたのである。這麼風流は昔から類があるまいと思ふ。風流は
由來腿の痛くなるものかと、獨りで苦笑爲たのであつた。因で、釋
迦堂に詣でず、栖霞觀(左大臣融が山莊の跡も尋ねず、小倉山、廣澤

池の勝も探らず、嵯峨天皇の離宮であつたと云ふ大覺寺にも立
 寄らず、檀林皇后の檀林寺建立の舊蹟、又後嵯峨上皇仙洞の地龜
 山院も亦宸居を占め給へりと云ふ名刹、天龍寺にも參詣する勇
 氣が無かつた。實は他日再び悠遊の期があらうと思つたからで
 大悲閣の如きも大堰川の岸に立ちて遙に眺めたのみで、小督の
 局の墓は道側であるから、是には詣うでた。琴聞橋といふ怪しい
 名の小橋のあつたのも記憶して居る。三軒家の前から船を僦う
 て千鳥淵を溯り嵐峽館を指して漕がせた。嵐山の景は天下耳あ
 るもの、鼎鑪亦能く之れを聞くで、今更めかして説くでもあるま
 い。特に花の時節でなかつたから、嵐山の真趣は充分に解し得な
 かつた。嵐峽館と云ふは温泉宿で、大堰川の南岸にある。鳥渡小綺
 麗な座敷もあり、料理も可也食はせる。

八瀬大原

庚子の七月十八日午前九時、京は柳の馬場の宿を小川煙村、森川
 蕉亭の二氏と共に、八瀬大原の勝を探るに立出でた。昨夜から雲
 の迷つて居た空が、町端近くなる頃俄に盆を覆へす許に驟雨を
 降らした。折角踏出して立戻るは残念であるし、洋傘一本では到
 底凌げず頗る往惱んだのである。恰も好し路傍に簑笠の類を售
 る家がある。早速煙村氏と余とは、槍笠と蓆を買つて身支度を整
 へた。蕉亭氏我等を顧みて、「飛脚でなし、飴賣でなし、眞逆で、それ
 祭文の親方とも見え、何うしても是れは判じ物である」と笑つ
 た。奈何にも可笑い風體であつたのに違ひない。雨を衝いて愛宕
 郡田中を過ぎ、山端といふ所に出た。右の方に當る田圃を隔て、

山容穩かなる中に、最面白きが、起伏の姿自ら妙を悉して、雨また是れに趣を添へ、忽ちに隠れ、忽ちに顯れ、おぼろくと消ゆるかとすれば、遽然翠巒の半顔笑む山麓に、續く一乗寺修學院などの村落炊烟横抹林に懸り山を掠めて、宛然一幀の水彩畫を見るの心地だ。午には些と早けれど、彼の有名な平八茶屋が此の地にあるので、二氏の案内に連れて入った。先づ第一に珍しく感じたのは、我等を迎へ入れた婢の服装で、頭には鬢の頗る張出た髪の上に、白い手拭を扁半の姉様被りに爲て、紺絞の單衣に、幅一寸五分程もあらうと云ふ平紵の袴を十字に綾取り、極狭い帯を前に結んで腰の周圍には腰衣に似て非なる、短い暖簾の如き物に、白の廣い平紵の紐を附けて纏うて居る。座敷は木立の繁った廣園を控へて、溪流に臨み、山に對し、境幽邃にして、風清かるべき所であ

る。生憎雨天の事故、寧ろ肌寒く感じた。總て座敷の裝飾と云ひ、其邊に使つて居る道具と云ひ、鄙びたる中に、何處となく一種の雅趣を帯びたる所床しく思はせた。鯉汁と芋汁飯とが名物だと云ふので、滿腹する程に飽まで食つた。そして再び強雨をついて、八瀬の方に向つたのである。山端の村には、書體立派に「向ふ五箇年、儉約に就き、物貫ひ乞食一切立寄るべからず」といふ同文の札を、家毎に掛けてあるのを見た。向ふ五箇年と期限を切つたのも面白いが、「儉約に就き」と拒絶の説明を附した所も、御叮嚀な次第だ。奈何にも上方らしく感じた。八瀬の蒸風呂は名高いものなれど、先を急ぐ道なので入らず。八瀬の村端に出でし頃は、降り續けし雨が益々猛烈になつて、之れに風さへ勢ひを添へたれば、槍笠も蓬も用を爲さず、全身忽ち濡鼠の如く袖を傳うて落つる雫の絶

間ない程であつた。八瀬より大原に到る間の途上目睹せる人々の風俗の、一々面白
いので、泥濘に踏入り、横降の雨に頭の傘繁く、満身びしょ濡の苦
みをも屢々忘れる程であつた。大なる草束を頭に掛けて往く男あ
れば、半疊の如き眞四角な蓆に赤味の勝つた澁紙を貼つた奴を
着て、田に働いて居る女もある。薪や柴を天秤棒の兩端に附けて
擔ぐのも繪に見る様だ。悠長な所に一種の面白味を感じた。婦人
の服装は平八茶屋で見たのと大同小異で、何れも例の幅廣な平
紵を褌にして、例の暖簾めいた物を腰に捲いて居る。是れは無論
着物の汚損を防ぐ爲に用ふる物であらう。褌や暖簾の色や柄は
年に因り、身分に因り、場合に因り、決して一樣ではない。年の若い
相應な身柄の婦人などは、却々美しい物を用ひて居る可成見

られる。他行衣を着る際にも、大抵此の褌と暖簾めいた物とは離
さぬ。而して、裾を高く端折つて、脚布をさげ、脚絆手甲に身を堅め
てゐる。年増になると、大抵頗る羅宇の長い煙管を、貰入の小襪と
一緒に、長い紐を附けて腰の中央に挿すのが習慣である。八瀬や
大原からも京都大阪神戸その他へ下女や茶屋女に出て、都會の
風俗に染んで洒落た姿になるのも、決して無いぢやあ無いけれ
ども、一旦その故郷に歸る時分には、全く昔の姿に立歸つて褌が
け、暖簾捲着けの舊式に據らなければ、村へは入れぬ。嚴重な不文
律があると云ふ話である。平家滅落の昔、建禮門院大原の奥に浮
世の塵を避けさせ給ひし時、奉侍の一女官某の局と云へるが、薪
水の勞を自ら取りて、門院に事へまつれる折の服装が、村民の模
範となり、其の面影今に遺りて八瀬大原の特異の風俗を成した、

と云ひ傳へて居る因て此の土地の人は彼の奇妙な服装を神聖視して何時までも改めぬのであらう脊負ひ又は擔ぐ代りに大抵の物を頭に乗せて運ぶのは此所の特異な習慣の一つとして、誰も知る所である包に爲て脇に抱へるなり、鳥渡懷中や袂にも入りさうな小さな物まで悉く頭へ乗せる習慣と云ふものは恐しいものだ町へ出て一袋の駄菓子を買ふ直に頭へ乗せる雨が晴れて洋織が邪魔になる直に頭に乗せて了ふ我々は、大原からの歸途で、十五六の小綺麗な装を爲た娘が傘を頭に掛けて澄して通るのを實際に目撃爲たのである例の澁紙貼の半疊は、此の土地では却々重寶な物で、簀の代にもなれば、又頭へ物に乗せる時には傘の代用にもなる。と云ふのは、頭へ物に乗せるには、先づ木魚の敷團めいたものを當て、其の上に据りの宜いやうに環を

乗せ、是れへ例の半疊を戴いて、其の上へ物に乗せるのである。勿論半疊は雨具であるから晴天には使はない。目新しき風俗に興じて、雨に惱みながらも足の疲勞を覺えず、大原の温泉宿大原館に着いて一泊爲た。此邊は山深く物靜にて都に近い所とは思へず、木曾山中などに旅寢する心地である。大原館の隣地に天理教會の立派な建物がある。其の祠の後に、附屬の座敷が數多並んで、庭も泉水も頗る美を悉し、料理屋風に出來て居るのである。此の中の一室へ我々は席を占めたのであつた。何う云ふ關係で融通を爲て居るか分らぬが、教會の座敷が温泉宿兼帯で随分藝者引連の客などの泊込むのもあるらしい。天理王の尊は何ういふ神様かは知らぬが、餘程商賣氣のある粹な神様であらうと感じた。料理は妙でもなかつたが、三人鼎座して、一圓の

酒を傾けた酔ひに随つて追々快談も涌き高論も出で興に入つた頃、何處とも無く河鹿の清い聲が聞えて來た。煙村氏は河鹿鳴く大原の里の夕暮は……との即吟、下の句が出來ぬとて頻りに頭を捻る中、我々の雑談に妨げられて物に成らずに了つた。此へ來て感心爲たのは、浴場の奇麗な一事である。序だから云ふが、一體京都及び其の附近の浴場は何れも立派だ。此の點は到底東京などの及ぶ所では無い。八新や平野屋などは其の例とするに足る。櫻湯と稱するのは、京都人の尤も自慢な浴場である。聞いたが見なかつた鳥渡の様子を云へば、湯槽の立派な事は勿論であるが、洗場は特に奇麗で、何處の出か知らぬが、縁や代猪色や、白や鼠色や、黄がかつたのや、極めて鮮明な色の滑な扁平い石と織部瓦とを取混ぜて、散しに敷き、其の間を漆灰で潰して

ゐる。で、水槽は雅な形の井桁などになつて居るといふ風だ。翌日早朝、大原館を立出で、大原の西陵を訪はんとて細き田舎道を辿り、瀧清水に壽永の名残を汲み、廻合の瀧を右に見て、寂光院に詣でた。院は木立繁れる山腹にありて、奈何にも物寂びたる趣。一本の老松は西廂を壓して、樹下影冷かに、莓苔長く伸び、苔花繁く、滴露音稀にして、哀風一炷の香煙を吹くのである。建禮門院が、其の昔遁世行持の地と聞き傳ふるにつけ、追憶の感限りないのである。此の寺より僅一丁許登つた所に、同院の墓處がある。大原西陵と申すのである。柵も嚴しく掃除も往届いて立派ではあるけれど、寂光院に詣うでた時程には感じなかつた。茲を辭して三千院に廻り、歸途三宅八幡に立寄た。茲の地勢や宮地の形状は、雜司ヶ谷の鬼子母神に似てゐると思つた。此の日の夕方、京都の宿

琵琶湖畔

に着いたのである。

近江八景の名は久しいもので、天下の人は耳舐であらうから、別に云はぬ餘り絶景であると聞いて居た爲か、目睹しては其れ程には思なかつた。特に粟津などは唯の松並木で、一向曲がない。瀬田唐橋なども、大鐵橋の所々に出来た今日では、一向詰らぬ否、その物ふりた舊式なところに一種の趣致はあるが、評判程のものではない。唐崎の松は珍しい大木には違ひないが、枯がさして、葉は頗る疎で、枝ばかりを眺めるといふ状態に心の折れ跡を感れぬやうにペンキ塗の葉鐵で包んだなどは、殺風景の極であつた。自分の見た中では三井寺の眺望が第一で、又は石山寺餘は云

ふに足らぬ様に思ふ。勿論、比良や矢橋は此方から眺めたのみである。湖畔の名物は數多くあると云ふが、鯉が一番名高い。宮内省の御用品にもなつて居る。此の外、小鮎の飴煮、時雨蜆、鮎、もろこ鮎、琵琶湖餅、辨慶の力餅などがある。奈良、舞子、宮島等の瞥見記も書く。豫定であつたけれど、餘り長くなる處があるから、總て省いて置く。

其四、大阪

船遊び

大阪滞在中、尤も面白く感じたのは、例の名高い船遊びであつた。七月二十三日の夕方から、浩々歌客氏と輕舸を蜷川に浮べた。流

水ゆるやかに、船聲軽く、櫻橋の下を抜けて降りながら、船端に凭つて兩岸に聳ゆる二層樓三層樓の立ならんで居るのを眺めた。何となく巢林子が曲中の風物を眼前に見るやうな心地が爲たのである。一體家屋の體裁からして東京のとは甚く變つてゐる。細々した陰氣な小綺麗な趣があつて、二階の縁側の張出しには、色々な盆栽を並べたり、軒には錦魚の硝球や、大な葱などを多く掛け連ねてゐる。河風に揺れる青簾から、裸美人の影が透いて見えると思ふと、嬌艶た扮装の舞妓が、欄干に凭たれて、船で往く客を金扇で招ぐのも有る。老妓が雁木に佇立んで、向ふ側の男と身振話で情を語つて笑つて居るのも有る。何となく、其邊に、小春や治兵衛が彷徨いて居さうに思はれる。光景すでに一種戲曲的懷舊の情を惹起すに足るのだ。船は靜に流れて、曾根崎橋、蛸橋をの

り越し、難波小橋に近くなると、八方の堀や河から出る船が落合ふ。藝者舞妓に花を飾つた十幾艘の畫舫が、舳舳相接して進むので有る。船を三四艘宛て、彼方と此方と會釋したり、呼送したり、小手招ぎ爲るのも有る。此の橋を抜けると、尤う淀川の廣々とした所へ乗出すのである。船を溯ぼらせて、天神橋下へ漕附ける頃は、築地邊の畫樓に灯ともりて、紅燈萬點星の如しだ。追々と納涼船が蟻のやうに聚まつて來た。中流の頃合の所へ棹を立て、涼を納れながら見物した。宛然東京の縁日を河の上へ持込んだと云ふ。狀船には、一々麻張や磨硝子や色硝子などの行燈が點してゐるから、其の波上に映る影と照合つて、却々うつくしい。其れに色々な物賣や藝人などが船で絶えず廻つて來る。八百勇とか、八百又とかと云ふ文字を筆太に、角漏斗形とも云ふべき麻張の不思議

議な行燈を掲げて、呼聲喧ましく寄つて來る。見ると紅生姜劍尖
 鯛芋、卷昆布、夏蜜柑、杏、茹、鶏卵、卷蕒、麥酒、日本酒などを店頭並べ
 るやうに飾つて有る。各人これを買つて興を助ける。末廣屋、松島
 屋など、誌した行燈を掲げた烟火屋も來る。一本何程かを興へ
 て揚げさせる。家根船に名入の提灯を懸連ねて、景氣をつけた義
 太夫語や新内語も流して來る。船の中へ見臺を据えて、紋附の羽
 織りか何かで藝者の多い大盡の舷側近くよせて、頻りに語つて居
 る。爾すると如才ない連中は、船を其の邊に漕寄せて、熱心に偷聽
 きをする。此の外、氷菓子屋も來れば、落語家も來る。雑々な種類の
 船と人とは群る。水の上でありながら水が見られぬとも云ふ勢
 實に盛んなものだ。子供や若者などは、河中へ入つて泳ひたり、追
 駈けこして遊んで居る。この邊は極淺いので、少しも危険がない。

因で斯う此の天神橋下が繁昌するのだと云ふ河中には二三箇
 所大いびいやホールも船の上に出來てゐる。手輕な西洋料理も
 食はせる。舟で岸から無賃で客の出迎へをするのもあるし、直棧
 橋から入られるのもある。大阪は夜になると特に暑苦しい。凌ぎ
 難い所だけに、納涼に就いては色々の工夫を凝してゐる。夜は宅
 の中に居る者より、外に居る者が多からうと思はれる。位納涼の
 熾んな所だ。天満天神、淀屋橋は申す迄もなく、繁華な土地にある
 橋々には大抵兩側に床几をならべて、氷屋の姉さんが澤山に出
 て居る。此等の多くは淫賣婦であると聞いて、一驚を喫した。藝者
 が橋の下を通る時には、屹度手を合せて橋を拜むのを見たが、何
 の爲めと聞いて見ると、船に酔はぬ呪詛であるさうだ。又藝者を
 乗せた船の多いのに、一向三味線の音が聞えないが、何うしたの

だらうと怪しむと、大阪の藝者は河の上で弾くと、糸がふけるからと、箱は持参しても容易に應じないさうだ。其の癖、八百屋の船の行燈には「三味線の糸あり」と特筆大書したのである。

人力車と車夫

自分が大阪に滞在したのは僅々十餘日を出でぬのみならず暑氣を恐れて多くは室内に閉籠つて居たのである。其所で大阪を見たと云つても極めて皮相の鳥渡見たるに過ぬに因つて、實は「大阪街上警見記」と題したい位であるが、其の街上の様すらも七分通りは見ぬのである。且自分が大阪の特質と云ふものを知るのに縁遠かつた一つの理由は、滞在中交際をした人々は大概純大阪人ではない。他國から移住せられた諸君であつたから、自然

人を通して大阪と云ふものを觀察する便宜も失つたのである。斯う分疏をすると、何も書く事はなくなる。が極めて浅い狭い當推量の所觀を筆の行くに任せて、思ひの儘に書き並べて見よう。誤解や見違聞違ひは右の事情であるから免れないとして、其所は大方諸君の御叱正を仰ぐ事と致して置かう。

先づ第一は人力車と車夫とに就ての感である。車體は東京のに比べて、奈何にも尺が縮つて居て脊を凭せかけると、後へ轉げ落ちさうに思はれ、且腰骨が縁に當つて痛いから、自然悠然後方へ凭かゝる事は出来ぬ。足も蹴込が狭いから、充分伸す譯には往かぬ。始めに乗った時の心地は餘程快くなかつた。是れは奈何いふ譯から、凭う窮窟に拵らへたものであらうと、不審に堪へなかつたのである。脊中の痛くない爲に、蒲團が敷いてあると申された

人もあつたが此の炎天の下を汗を拭きく乗つて居る身には厚い綿入の蒲團は奈何にも有難くは感じられない自分は往來の狭い割に人の通行が頻繁であるが爲に自然車體を狭くするの必要が起つたものであらうかと解釋をして見た然るに大阪嫌ひの某氏の説では其は大阪人の利己一方主義を代表したものだ乗る奴には困るが挽く方では非常に軽くて樂であるさうだと罵つて居られた眞逆爾ばかりでもあるまい兎に角自分には車體の狭苦しいには不平であつた又膝掛を三つにも四つにも折つて鳥渡膝頭の上に乗せられるのも恐縮した何だか遂に落さうで氣が揉めてならなかつた雨の降る時などは全然膝掛を剝奪されると云ふ憂目をも見た婦人などが曠着を着て乗つた時には嘸困ることであらう其れにガチャ／＼喧しい音の

するの耳障で好心地は決してしない恁悪口は云ふもの、大阪の車夫に就て感心した事も二つ三つある第一全速力を以て疾驅して休まぬことだ流石は一刻千金の駈引ある大商業地の車夫だけあつて如何にも活潑である第二には賃金が東京に比して頗る廉である第三は増銭や酒代をねだる者の殆どない事である此等の點から見ると利己一方主義から車體が狭苦しいと云ふ説は何うやら俄には信じられぬ東京では能くある奴だが八錢の所へ十錢銀貨を出すと釣銭はないと云つて否應なしに十錢丸取にすると云ふ悪い風が行はれる然るに自分は大阪滞在中に幾度も釣銭を車夫に求めて見たが一度も右やうの不快な事をされた覚えはない此の點から見ると東京の車夫よりは職務に勤勉で且正直だと云つて可い無論社會上の自然の氣

風から斯う養成されたのではあらう。此所まで見て來ると何うやら車體問題は略解けて來るやうに思ふ。大阪は商業地であるから、人の心は忙しく、悠然して車へ脊中を凭かけて居睡などをする餘裕はあるまい。車臺も此の必要から脊を真直に立て、乗り直飛下られるやうに拵へたものではあるまいか。膝掛のそつと乗せの四折は無論經濟思想から來たのであらうが、安直で迅速でさへあれば、那樣事には頓着せぬといふ實利氣質から胚胎したものであらう。安直で迅速であるからは、何處ぞで理合をせねば車夫は溜らぬ。車體の狭いのや、膝掛剝奪の點などは、尤も至極と云はねばなるまい。併し注文次第にて東京風の車も出すと云ふことにして、備附けて置いて貰へるなら、少し位は賃錢が高くも馴れぬ我々の情からは、其の方を頼みたいやうに思ふ。大阪

の車は大阪人に取りては最も便利で最も好都合なものであらう。

街上の所觀

東京から往つて先づ驚かるゝは、道幅の極めて狭く、人車二臺以上は並んで通られぬ事だ。心齋橋筋などの人込の中を車で通ると、道を往く心地はせず、何うやら勦工場の内を駆出して居る感じがする。往來の人が一時に兩側を見て通られる様でなくては、商賣が繁昌せぬと云ふ所から、恁狭い街道を好むのだとの説を聞いた。成程爾いふ譯かも知れぬ。併し餘りゆとりが無さ過るので、馴れぬ所爲か、快くはなかつた。馬車の皆無であること、荷車が異様な梯形である事、これは珍しい店頭に掲げてあるペンキ塗

の大看板に、大々的の美人の顔を描いたもの、多いのも、東京には餘り見ぬ現象の一つだ。其の又看板の美人像は商品と何等の關係もなく、唯人の目を惹く爲の手段らしい。或大阪嫌者は之れを評して此の一事以て大阪の風俗の淫靡なるを表彰して餘あり、と力んで居たが、否これは寧ろ廣告的技倆が進んで居るのだと見る方が正當かも知れぬ。各停車場で目に附く高島呉服店の帆掛船三艘に摸した廣告などは、東京邊には見ぬ好い意匠の一例だ。惣體廣告は進歩して居るやうに思ふから、先づ右の如く假に解釋をしたのである。夜なぞ街上を散歩すると到るところの店頭、長い大な提燈をぶらぶら吊してある事の夥多しいのや、晝通ると色々の大旗が翻転として、街上に靡いてゐるなぞも、東京では開店式を除く外は餘り見ぬ光景である。何しろ賑かな華

々しい事である。特に呉服店が各々意匠を凝して判物めいた裝飾を店頭、陳列して置くのも、我等には目新しい。是れは道幅の狭い餘徳、一つは熱度が烈しい爲でもあらうが、重なる町の往來の上、白い天幕で日蔽をしてゐるのは、傘無で歩かれると云ふ便利もあり、涼しくもあるので頗る氣に入つた。是は東京にない物の一つとして誇る價値はある。少く異様に感じたのは、夕方から夜にかけて、町を通ると往來の可成熾んな店頭、襦袢一つの積鼻褌さらけ出で店番して居るのや、半裸體の美人や、老人や、丁稚などが心地よさそうに匍匐になつてゐる。手枕で臥てゐる。足踏反して風に吹かせながら、大の字狀に寝てゐるものもある。是は土地の風俗かは知らぬが、餘り高尚な事とは思はれなかつた。裸體家並に半裸體家乃至褌一つの婦人などを盛んに見ることとは、到

底東京などの比では無い船に乗って、蜷川や江戸堀や京町堀な
とを夕方に通った事があるが、兩側の家々に頗る多く此等の醜
態を目撃したのであつた。東京にても貧民窟と云はるゝ極下等
の裏店町などを通ると、これに劣らぬ有様を見ることが出来る
が、大阪の方は中等の可成良い商人や何かの家に如斯き光景を
見るのであるから、一驚を喫したのである。
町を夜通つて心地よく感じたのは、鳥屋の家根の上に納涼櫓を
高く構へ、綺麗な簾をかけたなり、雪洞を點けたりしてあるのを見
たことだ。是は餘所目に見ればかりでも、奈何にも涼しさうで善
い思附である。それから東京とは鳥渡變つてゐることを挙げよ
う。此方なら生蕎麥とあるべき標燈の文字が麵類とあつて、赤文
字で牛肉とあるべきを墨にて精肉又はすきとあり、じやも又は

かしはとあるべきを鳥の一字を書いたのが多い。勿論鳥の一字
を書くのは、東京でも鳥渡氣取つた鳥屋には見ない事もない。其
から祭禮の提燈の文字が東京とは甚だ變つてゐる。東京のは御
神燈又は御祭禮と書く位で、別に異様なのを殆ど見ぬのである
が、大阪の方は町々に皆變つた文字を書くこと云ふ習慣らしい。
餘り種類が多いので十分一も記憶して居らぬが、知つてゐる分
を二つ三つ挙げれば、水氣金精だの天長地久だの神德皇恩など
と對句を選んだのもあり、中には唯二字で庭燎清燈、献燈などゝ
誌したのも見えた。又町の頭字を唯一つ大書したのも稀にはあ
つたやうに覺える。
大阪に一年餘寄留して居る或友人と、一日繁華な町を通つたと
がある。向から羽織なしで、小倉の袴を着けた書生體の男がやツ

て来た。すると友人は彼奴を見たら何だか東京の町を歩いてる様な気がする。と囁いた。自分は左様云はれる迄気が附かずに居たのであるが、成程大阪の市中には袴を着けた人は殆ど見かけぬ。これは商業地であるから、勿論爾あるべき筈だ。一向不思議はない。併し東京の町と自ら變つて居る所は此の一點でも餘程明かに見える。東京の山の手は申す迄もなく、書生の巢窟としてゐる本郷や芝や神田は論外で、又役所の多い麴町區特に神田橋内なども例外として、日本橋や京橋の商業専門地又は割合に書生や官吏の住はぬ淺草本所邊へ往つても、大阪程に袴の影を見ぬと云ふ事は決してない。或人の説では、大阪は商人が全權を占めて居る土地であるから、學者も教育家も文士も新聞記者も紳士も會社員も皆商人化されて了ふ。其所で袴を穿くべき筋の者も、

又之を穿くべき場合にも、大抵之を着ける事を好まぬ風がある。と云つた。或は左様であらうとも思つた。して見ると、大阪の一面には略式といふこと、平民的と云ふ事が何うやら非常に勢力があるらしく思ふ。又往來を往く人は、奈何にも皆匆忙して、東京のやうに長閑に徐歩して居る者の殆ど見られぬのも一つの特色である。これは自ら多忙で敏捷を要する商業地の氣性を示してゐる。時これ金の觀念が強いからでもあらうし、恍然して立つてゐられる程、道幅の餘地がないと云ふ理由からも来たのであらう。俥の音がガラ／＼と烈く喧しいのに引換へ市中を通る間に少しも口論や摺合の喧嘩を見ぬのは、東京に比して餘程文明流である。と云つて可い。自分は俥と俥の衝突したのを兩三度見た。此の場合に於て、東京ならば車夫が直に畜生何をしやがる。二手前の

眼は何の爲に附いて居るんだなどと罵り合つて、二言三言の末は、搦合になるか車の輪を蹴飛ばすといふ活劇を演ずるのであるが、大阪の車夫は奈何と氣を附けて見ると、ドシンと衝突すると、互に額に皺を寄せて怨めしさうに怨み合つたばかりで、一言も發せず、物別れとなつて了ふのである。是は頗る結構な心掛で、衝突をするのは、何れ雙方の不注意の鉢合であるから、互に諦めぬのが至當だ。口論や喧嘩をしては、第一乗つてゐるお客が迷惑で、兩方共に時間を無駄に潰すばかりか、搦合つて、傷を受けても、負はしても損の往くことばかりである。利害を冷算するの頭腦を持つてゐることは、確かに大阪人の長所に違ひない。情の爲めに事をあやまるの弱點は、關東人よりは遙に少ないらしい。車夫の場合、其の實例の一つである。凭いふ風であるから、市中に喧

嘩口論して、交番所の厄介になる者の、極めて少いのも、自然な譯である。全く大阪人は、先天的に無智文盲の輩までも、商人的性格を具へて居るものと見て、差支ないらしい。細かい事を穿鑿するやうであるが、往來を通る人々の帯の締方を、見ても、大阪人が奈何に經濟思想に富んで居るかい、分る。東京のやうに、貝の口に結んで居るのは、極めて稀で、大概挾帯に締めて居る。彼れでは、車に乗つても、結目が磨れ切れるの虞はない。聞けば、大阪の通例の帯は、男物も女物も、東京のよりは、尺が餘程短く出来て居ると云ふ。果して然らば、中々能く注意したものだ。と感服の外はない。富國強兵みな、經濟思想の發達に、依頼せねばならぬのであるから、奈何にも頼母しい心掛と云はねばならぬ。

家屋に就て

家屋に就いての感に云へば一體に町並は何處も能く揃つて、東京の様に着い参差がないから至極見よい心持がする併し何うやら概して云へば東方のよりは軒も廂も低いかと思はれる。繁華な通りは爾でもないが裏通り横町又は可成立派な町でも店を張らぬ所謂仕舞屋の多い所は大抵目の込んだ極めて嚴疊な格子に犇と簾を内に掛け其上更に格子の外へ嚴しい柵の様なものでも圍つてある是は鳥渡訝かしく思はれた夏の真中であゝるのに二重三重に圍をして何處から風を入れるのであらう。嘸も鬱陶しく暑苦しい事であらうと察しられるそれに引換へ夏の東京市は實に開放の東京開ツひろげの東京と云つて宜い大低

の家は表から間敷の有だけが一目に見通される戸も障子も残らず脱して僅に簀戸位をほんの片隅に立て奥深い彼方の中庭に吊した岐阜提灯の風にゆれる様から電燈や臺附洋燈の影に中形を着てゐる意氣な後姿まで隠れなく奈何にも涼しさうに透いて見えるのである勿論これは下町の夏の夜の光景で生塙又は板塙高き山の手邊は此の限にわらずとは云へ是れさへも生塙の隙間から窺けば開放の一段は下町の中等社會と少しも變らぬ下等の部は云ふまでもなく全家族及び資産残らず一目で表から調べる事が出来ると云ふ趣である恁いふ土地に住馴れた者の目からは大阪の密閉籠城の構へを見ては甚だ異様に感ぜざるを得なかつた或大阪通に聴く所に依れば門口を二重に堅める譯は此の土地は頗る窃盜が熾んで日中すら僅の

隙をねらつて下駄や傘を取る奴が横行する其の用心に斯く丈夫に防ぐのであると云つた或は爾かも知れぬ併し統計表を見ぬ上は果して東京の割合より強盗窃盗などの數が多いか被害者の數が多いか其所は分明でないから直に右の説を肯く事は出来ぬ尙何か遠い原因が他にあるのではなからうか其から金満家として世間に知れて居る紳士の邸宅なるものを五つや六つは表から見たのであるが何れも態と目に附ぬ質素な構へを云ふ註文の建築らしい又名高い料理店例へば堺卯とか灘萬であるとか云ふ家でも前向は少しも華美でも立派でもない通例の仕舞屋位にしか見えぬ紳士の邸宅には縁なくして入る機會を得なかつたが噂に聞けば内部は頗る金をかけた美事なものであるとの事且上等の座敷になればなる程何となく暗慘と

して極めて陰氣に出来て居ると云ふ話である又料理屋なども自分の見た範圍で云ふと森吉樓などは例外として名高い家は、何うやら暗く陰氣な座敷の建方になつて居るやうに思はれた光を内に頼むと云ふ尙綱主義から前向を飾らぬ習慣であるとすれば奈何にも奥床しい高尚な考へと云はねばならぬ其れにしても内部を暗くする趣意は一向に解せぬのである現に自分が能く往來した二三友人の宅などを見ても光線も取れるし風も入れる事の出来る充分の餘地ある方面を態と壁で閉いだ建方の座敷が多い甚だ解し難いことである然るに自分の友人等の宅はそれでも餘程東京化したもので純大阪風の家は更に暗いものであると聞いては愈々怪訝の念を強うした譯である一體から云ふと大阪は東京より熱度も強し風も少し夏の生活を

考へる者には、極めて快活な明るい風通しの宜い建築法を取るの
が自然の理であるべき筈なのに、事實は全く反対であると云ふ
は餘程變つての現象と見て差支へはあまるまい。自分は今も其の理
由を瞭解することが出来ぬ。

大阪の婦人

大阪の婦人と標題は置くもの、是れも多くは街上の所觀たる
に過ぎぬので、當否の程は覺束ない併し管見だけの事を云つて
見よう。京都を辭して、大阪に赴く時に一友人が自分に云ふのに、
「大阪婦人は頗る華美で濃厚である、能く注意して見給へ」と教へ
て呉れた所が大阪へ來ても、一向華美であるとの感じは爲な
つた。濃厚か淡泊か其所は深く交際つて見ぬから判らぬ。在阪諸

友が自分の爲に催はして呉れた宴會などに臨んで、大阪美人な
るものを瞥見したのであるが、東京にも上方風が吹すさむ。昨今
である爲か、換言すれば關の東西が風俗上極めて相接近して來
た所爲か、大阪南北の藝妓中尤物との噂ある者を見ても、新橋邊
のに比して少しも艶麗の點に於て、特長あるとも覺えぬのであ
る。寧ろ雛妓などの打扮を、東西比較したら、新橋の方が遙に綺麗
である。と評しても宜しからう。自分は唯その化粧のこつてりし
たる點に於て、稍濃艶の評の一端を窺ひ知つたのみである。土地
に馴れた人々は何とも思はぬか知らぬが、他郷の我々からは頗
る異様の感を惹いたのは、東京に比して、客と藝者との位置がど
うやら顛倒して居る趣のある事だ。何故かと云ふに、大阪では客
が種々の藝を盡くして座敷を賑かにするの衝に當つて、藝者は

極めて返返ッて、濟したものだ。碌に盃盤の幹旋もせず、萬事は仲居に譲ッて、ツンと控へた生人形の態度を取ッて居るからである。大阪の客には藝人が多く、特に素人義太夫の名人が雲霞の如くであるから、客の方が喉を聞かせよう、唯糸を借りよう、と云ふ了簡で遊ぶのが多数である結果だ。と説明した人もあつた。成程爾いふ次第かも知れぬ。藝者の責任問題を議するでもないが、兎も角も藝者たる名義に對して、頗る職務に不忠實であると申しても宜からう。動かざる事山の如し、とは京阪地方の藝者を評するに、最も恰好な語であると思ふ。それでも、幾分か大阪の方は京都より活動の方に近いやうに思はれる。何しろ、お座附なるものは無し、彼の三味線に何時手が掛かる事やら、と焦燥さ溜らず徒らに饒舌を弄して、時の立つのを知らず顔に藝者の方がお客面

をして居るのは餘り感服せぬ。催促をせずには置けば何時までも歌ひも弾きもせぬ流儀らしい。其れから汗や膏で手が棹に附くからと云ふので、幽禪か何かの禰禰の袖口を拇指にかけて三味線をひくのは、東京の藝者が一般にする所だ。これは烏渡趣のわる佳い様子なものであるが、大阪の方は此の禰禰の袖口に換へるに、三錢五厘位の安手帛や、上等の所で踊手拭のお古を使ふのであるから、奈何にも盛粧の美人を臺なしに破壊して、腹の底が見透く感起させるのである。甚しい奴は、八口から手を出して、撥を持つのも見たが、餘りに殺風景で、餘りに經濟思想瀾漫の感に打たれ、内々少し心細かつたのである。併し、悪くばかり云ふべきで無い。踊や地唄や義太夫などの點に於て遙に東京の藝者に立優つた所があるのを承認する。仲居なるものは、東京の女中に

比して藝者の代用にも往々なる丈わッて幾分か優ッて居るらしい其の仲居の踊や唄も鳥渡窺ッたが是れは茶氣あつて濛いものと感じたのである。

前には藝者及び仲居などに關する管見記を書いたから此の項には市中の婦人に就いて述よう。總體から其髮形や服装などを評すると到底華美であるとは云ひ得ぬ寧ろ東京に比して質素であるとする方が適當らしい。街上で可成立派な婦人に出會ッても左のみ華麗な服装は餘り見かけなかつた。其に紺地の葛衣を着た婦人を頗る多く見るので彌々質素であるとの感を喚起したのである。併し是は見聞の狭い爲かも知れぬから斷ッて置く。一度浪花座へ往つた時なども東京の歌舞伎座の棧敷や鴉を眺めた時の様に濃艶花の如き盛装の婦人を見なかつたので爾

いふ感を浮めた。これは藝者などに就いて云ふのでは無く、普通の婦人に就いての所觀である。婦人の鬘は何となく頭に添はぬやうだ。持て來て押附たやうで何うも落着がない。且その形格は餘り善いとは思はれぬ。其から素人でも黒人でも一態歩態が嫺々でない。東京は内輪に踏むのを佳しとするが大阪邊では爾ではないらしい。が見誤りであらうか。商家が勢力ある地だけあつて質素な所は眞面目であるかも知れぬ。少々恐縮致したのは若い婦人の間に堅やの字に帯を結ぶ者の頗る多いことで。成程堅やの字は御守殿風とあつて上品な物には違ひない。隨ッて支那緞子や錦縹の帯を斯う締めると奈何にも引立つのであるが大阪では幽禪メリンズや洗酒しの綿縹子を勿體らしく堅やの字にするのも多い。これは頗る恐入つたのである。今少し釣合や調

和といふ事を考へて貰ひたく思ふ。何國の婦人の情も同じで曠着を命から二番目位に思ふは關の東西共に變りはない併し大阪の婦人は餘りに此の曠着を大事に思ふ心を曝露し過るやうである。曝露するだけ天真爛漫で宜しいと云へば云ふもの、聊か興の醒める心地がする。芝居や船や停車場などで、屢見たのであるが、盛装の美人が少し着物の汚れさうな處があると、衆人環視の真中央で、くると尻を捲つて、赤い褌をさらけ出し、平然自若とする。是れは見馴れぬ所爲か、少し冷汗を覺えた。餘りに打算的で、餘りに經濟主義が露骨であるから、本來の修飾すると云ふ趣意とは矛盾してゐる。結構とは何も云はれぬ、勿論雨中車へ乗る際などは、例の膝掛剝奪の爲に、已を得ぬ次第もわらうが、芝居や寄席や待合室などで、くると巻

るのだけは全く御免を蒙りたく考へる。次も又恐縮の箇條であるが、素人も黒人も一體に衆人稠座の中で、化粧鏡を振廻し、紅白粉の騒ぎをする。これも醜態であると感ぜざるを得ぬ。人の知らぬ間に木地を塗りかくして、綺麗に見せようと云ふ所に、化粧の功能もある筈だ。其を満座の間で、鹿子斑な黒地を白く塗るので、一向に榮ぬ次第だ。種を見させて手品を使ふと、同じ理屈である。若し素顔が自慢とわらば、全く化粧をせぬが宜からう。何しろ、お膳が並んで居る座敷の中で、刺肉庖刀を振廻すに似て、頗る殺風景に感ずる。

湯屋と理髮店

湯屋と理髮店との所觀を語らうか。是れは僅々兩三軒を覗いた

許の話であるから、無論管見で、大阪の一般が斯であるとは云ひ得ぬ。自分の見た範圍で云ふと、總體湯屋は東京よりも立派で、綺麗であるやうに思ふ。先づ門構が厳しく、門から入口まで七八間程も御影石を敷詰めて掃除も綺麗にゆき届いてゐるから、門外の鳥渡見には料理店でもわらうかと怪しまれる。番臺や衣裳戸棚などの體裁は別に東京と變つた所もないけれど、大形な硝子繪の額面などを掛けて、多少關東よりは裝飾がある。其に延喜棚を細々しく賑かに飾つて番臺の背後に吊してゐるのは、東京には見ぬ一つだ。又近來物騒に就き云々の貼札の、其所彼所に多く、柱には湯屋泥棒某の寫眞を掲示してゐるのなども、東京には遂ぞ見ぬ珍しい現象の中に數へられる。奈何さま竊盜の多い所と察しられるのである。其の所爲か着物戸棚なども頗る嚴重に

錠前を附け鍵を持つて入る様になつて居る。東京の方も形式だけ、は同じ事であるけれど、大阪の方は實際勵行せられて居るらしい。又其の必要があると思へる。番臺の上の見張番の前には講釋臺のやうな物があつて、此の上に板へ竹針を刺したのがあつて、是に眞鍮の指環が、二三十も貫し並べてゐる。かと思ふと、短冊のピラ／＼の附いた五厘位の髮挿が、同じ數程其の傍らに整然と刺し並べてゐる。何れも番號を打つてゐるらしい。聽いては見なかつたが、惟ふに是れは婦人の入浴者の指環や髮挿の紛失のないやうに預る時の手形に渡して、請取る折の間違ひを防ぐのであらう。奈何にも用意の周到である事と敬服した。此等は東京でも學ぶ必要があらうと思ふ。二説に戸棚の合鍵の預證に男へは指環女には髮挿を渡すのだといふ。彌々着物を脱いで流板へ

出て見ると、全面御影石で敷詰めてあるのには、一驚を喫した。是れは石材の豊富な土地である御蔭ではあらうが、何しろ湯垢など、ぬら／＼滑ると云ふ、悪い心地もせず、足を取られて轉倒といふ危険もなし、殊に夏である所爲か、云はれぬ好い感じであつた。湯も清く、湯槽の三方から自在に入れるやうに成つて居るのも窮屈でなく、至極宜しい。唯少々不満足に感じたのは、湯を汲む小桶の餘りに浅く、お盆に近い爲、一度か二度手拭を入れると、忽ち乾て了ふの一事と、湯湯の汲口が丸い穴になつて居て、漸と桶が入るか入らぬと云ふ組織、これは馴れぬ者には不便に感じさせるのであつた。一體から見ても、遙かに東京の湯屋に増さつて居ると評すべきである。序に云つて置くが、普通の家の流板も、一體に奇麗に清潔に出来て居るらしい。是は例の石材の豊富である。

のと、悪疫流行の熾んな土地であるからの結果でもあらうか。理髪店には等級もあらうし、場所によつて體裁も違つて居やうが、自分の見た範圍では別段東京のと變つた著明の點もないやうに思ふ。ざらにある東京の理髪床に比べては、幾分か機械や道具が揃つて居るらしく感じたのと、東京では髯も剃り髪も刈つて、全然出來わがツてから始めて顔を洗ふのに、大阪では先づ髯を剃る時に顔を洗はせて、最後に再び洗ふと云ふのが違ふ。其れに東京では立たして腰を曲させて洗ふのに、大阪では椅子に腰をかけた儘で洗ふ、是だけが相違の點であると思はれた。

芝居と寄席

芝居と寄席といふ標題は置くものゝ實は浪花座と千日前の文

明館を一度づゝ覗いたのみであるから、警見中の至極の警見に過ぎぬが多少の感しを述べよう。先づ芝居に往つて、土間うづら棧敷から大入場まで見渡した所で、観客の七割は婦人であると云ふのは、東京とは餘程變つて居る。東京の方では男が六分、女四分と云ふ割合であると見れば、大差はない。時に因ると、七三の割にもなるが五分々々である事は極めて少ない。それから、感心したのは、観客一同、奈何にも静肅に熱心に見物して、少しも悪戯をしたり、罵評を差挿さんだり、無闇に大聲で怒鳴たりする者の殆どない事だ。東京では夢にも見られぬ好い習慣である。是れは寄席の方も同じで、文明館の呂昇一座を聞いた時にも、奈何にも静であつた。東京で女義太夫の出る席などは、例のどうする連や、トル、連など云ふ異様な聲や、下足札で火鉢を敲く奴や、互ひ

に奇警な罵評を放つて、聴衆をドツと笑はせやうといふ愚なる競争をするので、非常に喧騒を極めるのであるが、是に比べると實に静に熱心に聴いて居るのは實に感服したのである。一つは遊藝熱心の土地であるからでもあらうし、聴衆は商人のみで、書生などの亂暴者が混らぬと云ふ理由もあらうけれど、兎も角、文明流であるのと褒めて宜いのである。一度位見たばかりで、役者の技倆や観客の趣味の高下を評する譯にはゆかぬが、自轉車や電話などを使つて場當りに骨を折つてゐる趣きや、見物が又これを見てワツと受けるのを見ると、鳥渡此は考へものである。我當が藝に熱心である事と、土之助の奇麗である事だけは確かに見受けた。其から茶屋から酒の肴を、朱塗の一間棚とか二間棚とか云ふものに載せて、小皿盛にして持つて來るのは、場を取らぬの

みでなく、小奇麗で至極氣に入つたのである。今一つ感心したのは、閉場になる迄、満場の見物は、少しも動かさず立たすと云ふ有様で、最終まで見て居るのは、頗る熱心な事であつた。是は他の見物の妨碍にもならないから、至極好い習慣と云つて宜しい。東京では大抵最終の一幕は、残して歸る者が多いので、傍の熱心に見てゐる者の心まで騒すのであるから、自然落着いて見て居られぬことになる。役者もこれが爲に熱心に藝をする張合が抜けよう。大阪には此の悪弊がなくて結構である。

文明館の女義太夫へ入つて、先づ驚いたのは、席の立派で殆ど小劇場らしく見える事であつた。更に高座が御殿めかして、真紅の飾紐の附いた金びかの襖や、御簾などの奇麗なのや、大小の提灯や小旗の夥多しく賑かに飾られたのにも一驚を喫した。兎も角

これ位奇麗で立派な寄席は、断じて東京市中にはない。其の代り、寄席で場代を取ると云ふのも、東京には無い例である。棧敷四十銭、二階七銭、三階三銭、通り四銭といふ定めであつたが、鳥渡東京の小劇場程の金を取るものであるから、随つて斯う立派にして置かれるのであらうと合點したのである。此の不廉の割に入りの悪くないのは、千日前であるからと云ふのか、一般に大阪は遊藝好の人が多いといふ理由から来たのか、其れは判じかねたのである。鳥渡珍らしかつたのは、客から出す祝儀を一々語つて居る最中に見臺の側へ、串のやうなものに挟んで、大入と書いた小形の封筒に入れて立並べる事である。更に珍しかつたのは、通ひを勤める女が、右の祝儀を高座の上立てかけて、途端に之を贈つたお客が、些とだが車代だよなどと叫ぶのである。人氣のある奴の

左右には此の串刺の祝儀が五六本も駢列されるのであつた。附けて云ふ余が湯屋にて見たる指輪と髪挿とは着物戸棚の鍵の手形なる由友人より注意があつたから誤まりを正して置く。
(をばり)

非自然主義



明治四十一年九月十六日印刷
明治四十一年九月十九日發行

(實價金五拾五錢)

著作者

後藤寅之助

東京市日本橋區堀田四丁目五番地

發行者

和田靜子

東京市京橋區橋本二丁目二十二番地

印刷者

岡 功

東京市日本橋區堀田四丁目

發行所

春陽堂

電話本局五拾一番
掛替口區一六一七

印刷所

株式會社 國光社

東京市京橋區橋本二丁目二十一番地

伊原青々園氏後藤宙外氏共編

唾玉集

實價金十九錢 小包料十錢

現代に於る文藝技工其他各方面に渡りて超凡の名家が苦心と實歴とを其人自から語られたる所興味津々として盡さざるの間に於て讀者の雅益蓋し尠少ならざるべし

▲自作の由來(幸田露伴氏作) ▲小説家の經驗(故尾峽紅葉氏) ▲戀愛問答(同上) ▲作の材料と其運用(廣津柳浪氏) ▲編史と作劇(故福地櫻痴氏) ▲小説家の覺悟(長谷川二葉亭氏) ▲かくなんぼ(故齋藤藤雨氏) ▲櫻痴小説の來歴(村上浪六氏) ▲自作小説の材料(森鷗外氏) ▲作察苦心談(坪内逍遙氏) ▲しりこみ(櫻庭葉村氏) ▲翻譯の苦心(故森田思軒氏) ▲洋畫上の閑歴(河村清雄氏) ▲寫眞術(故大橋乙羽氏) ▲日本の服裝と流行(高橋義雄氏) ▲衣服の新意匠(野口彦平氏) ▲玩具の今と昔(清水清風氏) ▲指物と指物師(某指物師) ▲漁夫の境涯(佃島桐頭某) ▲老探偵の閑歴(某刑事探偵) ▲盜賊の心事と其隱語(同上) ▲新聞探訪の述懐(某探訪者) ▲清元淨瑠璃(瑠延壽大夫、故お葉、故延壽翁) ▲長唄の話(松永和楓) ▲義太夫語の閑歴(竹本和國) ▲假聲遣ひ(中井某) ▲天保時代の梨園(故四方梅彦氏) ▲芝居ばなし(故高須高燕氏) ▲幕の内外(故落合芳與氏) ▲團十郎と佐團次(西田董坡氏) ▲現時の劇壇(某) ▲相撲道と行司役(故木村瀨平) ▲藝妓と客の今昔(千歳米坡) ▲維新前後の俠客(同) ▲女の髪かたち(女髮結某)以上

宙外氏著書目錄

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 小説 | 小説 | 小説 | 小説 | 小説 |
| し | か | 腐 | 新 | し |
| ら | げ | 肉 | 機 | ら |
| 露 | ろ | 團 | 軸 | 露 |
| | ふ | | | |
| | 集 | | | |
| | 泡 | | | |

著氏外宙藤後

山倉名

●好評

●好評

錢八稅郵錢十七價定

仰ぎ見る名倉山、朝に彩光を湖上に泛べ、夕に
櫻雲の月に映ず、山影水色これ實に猪苗代湖に
見るべし、
本書は著者がこの明媚なる湖畔七春秋の得意の
作にしてまた近時文壇稀に見る雄篇なり

→行發堂陽春←

著氏外宙藤後

影つ立に月

美
本

洋
裝

錢八各稅郵錢十六各後前

曾て前篇後篇共に大喝采を博せる本書は今や續篇漸
く成る。人生の眞味を甜めんとする者、深省を發する
小説を求むる者、興味と知見とを併せ覓むる者、煩
悶に堪へざる者、厭世の念に苦む者、慰藉者を求め
て得ざる者、奮闘力を失へる者、いづれも來つて本
書を緝け！

→行發堂陽春←

IFUN13

每月一回

編輯主任 後藤宙外氏

新小説

一日發行

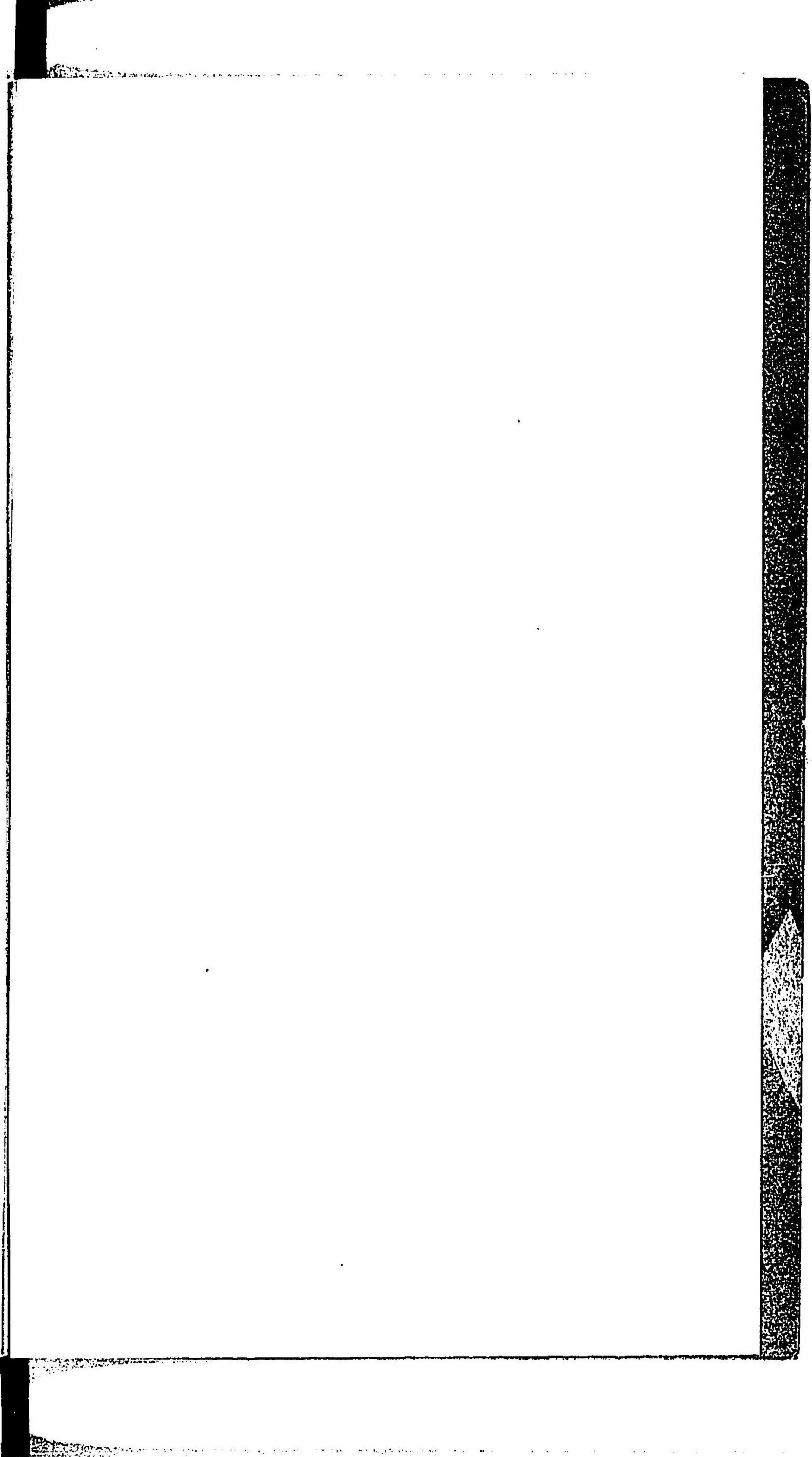
「新小説」は當代文藝の中樞として常に諸大家及新進作家の雄篇を江湖に紹介し、更に本年より思湖家庭の餘味なる二欄を加へて文壇第一の大雜誌たる面日を發揮せり。

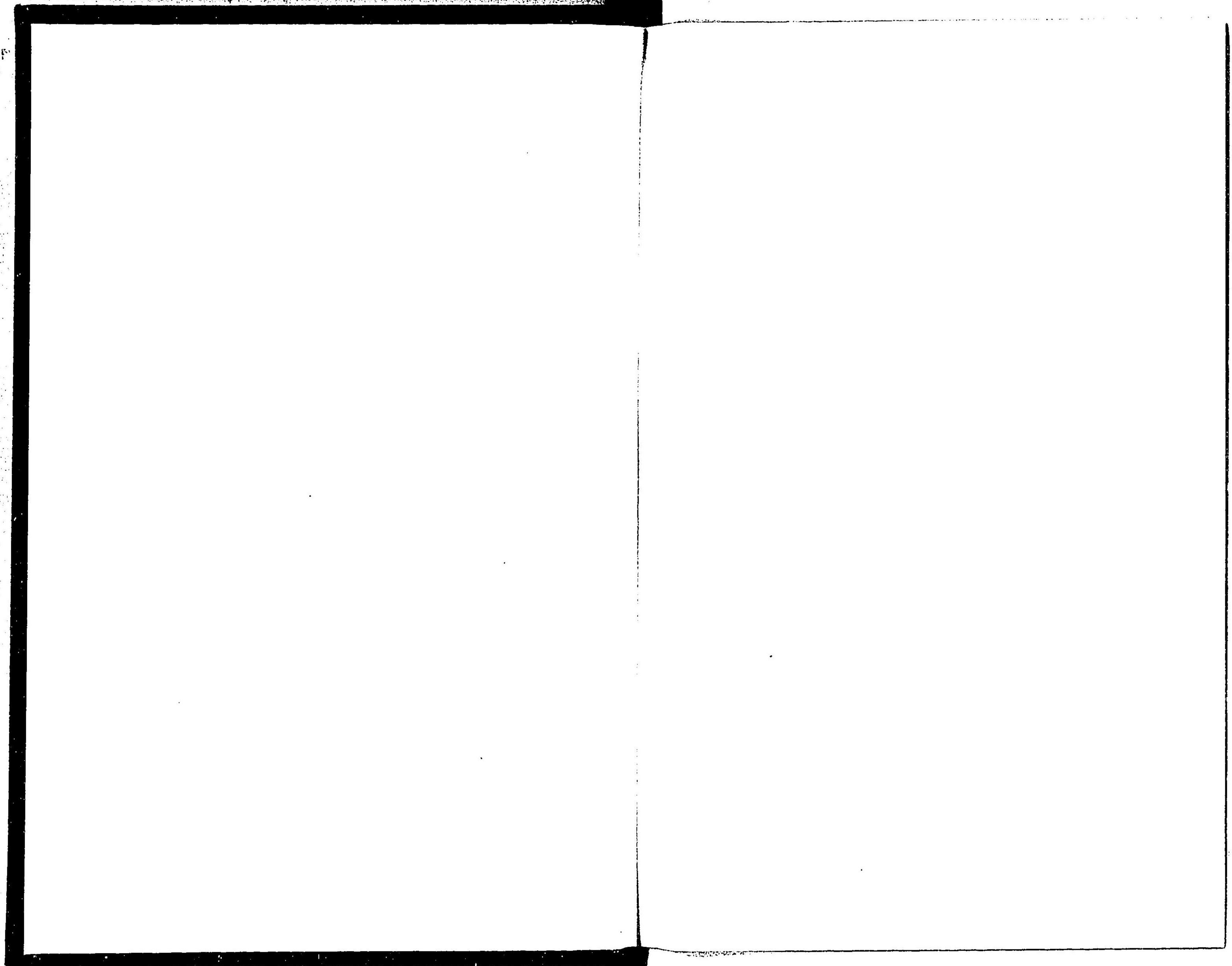
◎本誌に執筆せらるる諸大家には露伴氏柳浪氏抱月氏天外氏竹風氏鏡花氏風葉氏春葉氏曙山氏柳汀氏荷葉氏嘯月氏春雨氏宙外氏その他十餘名あり。掲ぐには毎號長短數篇の作を現時文壇の諸大家に起草を乞ひて之を掲ぐ。には宗教、文學、教育、社會に關する當代大家の學說を網羅す。には高尚の文と平易趣味の記事とを併載して上下一般の歡迎に背かざるべし。には諸名流の詩、美文等を採録し傍ら寄書の後秀なるものを併載して光彩陸離。は社會各方面に涉りて一代の名家と稱せらるる人々の說話を書記して風手意氣に躍々。又此外の珍談奇聞をも掲ぐ。趣味の相撲、落語、講談、淨瑠璃その他百般の藝道に關する多趣味の記事を收む。興味と實用を兼ね有して以て家庭の良師たるを期す。衣服、風俗、裝飾品その他社會百様の流行を精細に報導し、巧妙の挿畫を以て記事の足らざるを補ふ。は社會各方面の鋭利なる觀察記にして、傳神の挿畫と巧妙なる寫眞版とを以て文の足らざるを補ふ。其浴簾の識と明幽の觀察を以て現張竹風氏に忌憚なき批評を加ふ、蓋し之れ我文壇の快文字なり。は宙外氏が公平穩健の筆を以て縱橫に現時の文界を論評して餘さざるべし。

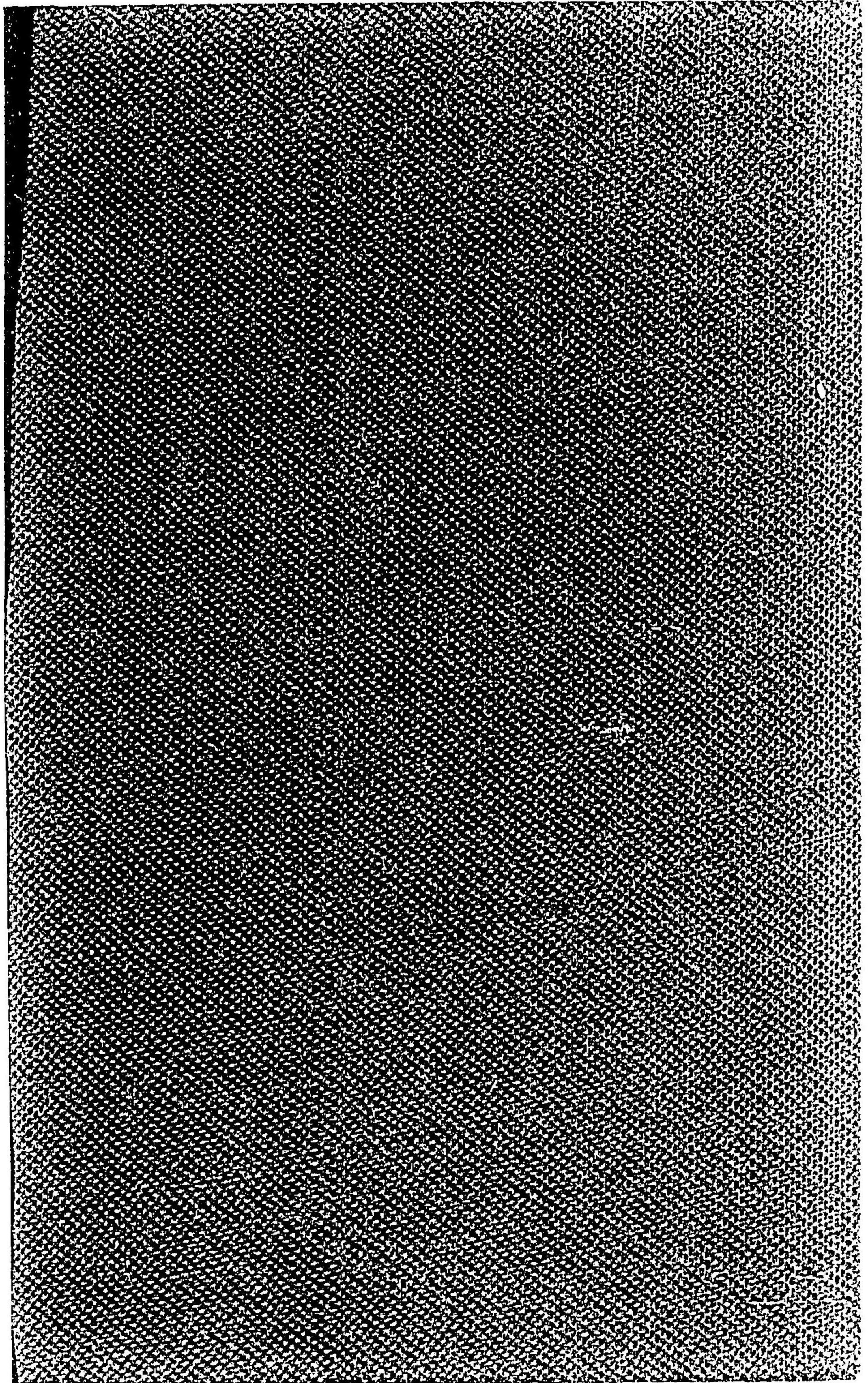
時文欄 我觀欄 社會欄 家庭欄 藝苑欄 譚叢欄 文苑欄 雜錄欄 思潮欄 小説欄

凡紙油繪川村清雄氏 實價 ①一冊二十五錢郵稅二錢五分 ②六冊前金郵稅共一圓五角九錢 ③十二冊前金郵稅共三圓十二錢 ④郵券裝畫同新進作家 價 代用一割増(外國は十四錢)

發兌元春陽堂







17

341

084799-000-9

17-341

非自然主義

後藤 宙外/著

M41

DBA-0144



